縄文前期前半期における轟B式土器群の様相

——九州，山陰地方，韓国南岸を中心に——

李（イ）　相均（サンキュン）

I．はじめに

轟B式土器は戦前から注目されており，縄文時代前期の九州地方を代表する土器群である。松本雅明・富樫卯三郎の論文以降の轟B式土器の研究は，しばらく停滞ぎみであったが，アカホヤ火山灰の認識がなされた後には活性化する。中・南九州においてはアカホヤ火山灰層の上下の土器群の資料が蓄積されつつあり，轟B式土器はアカホヤ火山灰直上で出土することが分かった。従って，アカホヤ火山灰は轟式土器の研究において，最も重要な鍵層となっており，今後はこの火山灰の分層によって轟式土器群の位置づけが正しいものになると考えられている。アカホヤ火山灰の上層から出土する轟B式土器は，分布において九州のみならず，山陰地方や韓国南岸といった地域でも類似のものがみられる。轟B式土器の最近の研究も，この広域に広がる条件を反映して当該期の九州と山陰地方の関連性など系譜問題まで幅広く触れようとしている。ところが戦前から大別されてきた轟式土器の「単純な深鉢形」と「長頸を有し腹部の張った深鉢形」（以下それぞれ「単純深鉢」・「屈曲型」と呼ぶ）土器に対して，研究者の視角や系譜および関連性など，それぞれ異なる見解が示されている。また，轟B式土器と器形において類似する韓国南岸の隆起文土器とは，その関連性が認識されつつも具体的な論証までは踏み込むことができなかった。近年日本においては東アジアの中から縄文文化を探ろうとする研究がなされ，その成果も出てきている。このような現状からみれば轟B式土器の実態の解明は，九州と山陰地方だけの問題ではなく，韓国南岸を含む三地域の総合的な問題として取り扱わなければならない。

考察方法としては，今まで宮本一夫が三つの地域の土器について順次示してきたように，各地域の土器において器形と文様を中心として特徴の異なる属性に分類し，これら各類の土器の併行性や型式変化による時間差などを考えていきたい。ここでは，各地域ごとに次段階につながる在地性の強い土器をⅠ群，三つの地域に分布の広がる土器をⅡ群に大別し，他論考ではあまり示さなかったこれら相互のあり方と関連性などを段階ごとに検討することとする。また，轟B式土器の広域分布における様々な問題を取り上げ，この土器の未解決となっている系譜問題や「単純深鉢」と「屈曲型」土器の性格究明，轟B式土器と隆起文土器の関連性といった諸問題を考えていきたいと思う。

II. 三地域土器群の研究史

1) 轟B式土器の研究史

轟式土器は熊本県宇土市にある轟貝塚を標準遺跡とするものである。1919年浜田耕作らによって発掘が始められ，いち早く系譜問題が注目されてきた。戦前の研究は型式論よりもむしろ系譜論に重点がおかれ，1930年代の段階ではもはや韓国南岸の隆起文土器（及川 1933）や関東地方の茅山式土器（小林 1939）などとの関連が示された。このような系譜論は，戦後になっても後学に引き継がれ，貝殻条痕文土器が縄文早期末ごろ東日本から西進を果たして西日本や九州にも広まるという説が最も多い。

この轟式土器の細分や変遷などを最初に体系的に論じたのは松本雅明・富樫卯三郎の論文である（松本・富樫 1961)。1958年に行われた轟貝塚の発掘成果をもとに轟式土器をA～D式に細分を試みている。A式は条痕文のみが施されるもの，B式はいわゆるミミズバレ状の隆起帯文からなるもの，C式は浅い条痕を残し波状文を主体とするもの，D式は半截竹管もしくはへら状の施文具を用い内外面に短直線文・列点文・爪形文を施すものとした。この内，A式・B式・C式第一類の大部分は縄文早期に，C式の第一類の一部分と二・三類は縄文前期の第1期に，D式は縄文前期の第2期に位置づけた。この後に轟式土器に関連するいくつかの論考が発表されるが（大脇 1962，乙益 1965，江坂 1967a，b，河口 1967a，b），この松本・富樫が示したほど詳細な分類はなく，またこの論考を再検討する立場であった。

1970年代の半ば頃から地質学者によるテフロクロノロジーの研究が精力的に進められ，南九州の屋久島付近で鬼界カルデラが噴火し，アカホヤ火山灰を積もらせたことが分かってきた(町田 1977，町田・新井 1978)。これらの研究に刺激を受け，南九州の遺跡をアカホヤ火山灰層に対比させて整理し直したのが新東晃一である（新東 1978，1980)。アカホヤ火山灰の下層では押型文土器・塞ノ神A・B式・平栫式・前平式・吉田式・石坂式土器などが出土し，上層では轟式・曽畑式土器などが発見されることが分かった。これは今までの縄文早・前期土器の編年観を大きく塗り変えたものであり，以後の火山灰の層位的発掘の重要性を認識付けた論考であった。

その後，アカホヤ火山灰層の認識のもとでの発掘が増加するとともに，アカホヤ火山灰層下でも新東によって縄文前期と分類した轟式土器の一部が縄文早期の塞ノ神式土器の後の型式として存在することが指摘された（坂田1980，河口1985a，b)。坂田邦洋はアカホヤ火山灰直下の隆起帯を施すものを轟Ⅰ式とし，塞ノ神式土器よりは古くならないとした。また轟Ⅱ式以降の土器はアカホヤ火山灰の上層から出土し，轟Ⅱ・Ⅲ式がいわゆる轟式土器であり，轟Ⅳ式を轟式土器の終末のものと考えている（坂田 1980)。河口貞徳は鹿児島県の片野洞穴の層位を中心として轟式土器をⅠ～Ⅳ式に分類した。条痕のみを施すものや更にその上に曲線文・斜格子文を施すものを轟Ⅰ式，ミミズバレ状隆起帯で器面を飾る轟Ⅱ式，貝殻を施文具として連点文を施しキザミ目隆起帯を貼りつけるものを轟Ⅲ式，貝殻を施文具として連弧文を施すものを轟Ⅳ式と設定し，順に型式変化を想定した

（河口1985）。これら坂田，河口の研究はアカホヤ火山灰上下の轟式土器を分離して考えていたものの，細分までは至っていない。

近年資料の増加とともに，轟式土器の研究に今までなされなかった細分の試みや九州だけに留まらず山陰との係わりを究明しようとする研究が続々と発表された。山口信義は轟貝塚で出土した轟B式土器の京都大学資料と熊本大学資料とを検討し，器形から「張胴型」と「底すぼまり型」に大別した。また，中・四国地方では張胴型器形が羽島下層（古）式の在地系土器と，底すぼまり型が羽島下層（新）式とがそれぞれ共伴するという状況から張胴型から底すぼまり型への変化を考えた。すなわち，両器形の土器が一系統のものであることを想定している（山口 1988）。

宮本一夫は最も充実した京都大学の資料の再検討を試みた。この検討はアカホヤ火山灰直下とされるものを除外し，轟B式土器のみを取り扱っている。分類は，ミミズバレ状隆起帯を口縁に平行に貼りつけ円筒状の深鉢を呈するものをⅠ類（a～c），ミミズバレ状隆起帯ないし微隆起帯を持ち胴部で段をなして屈曲するものをⅡ類（a～c），微隆起帯上を刻み胴部で一度段をなして屈曲するものをⅢ類（a～c），胴部で屈曲する器形で胴部上半に押引刺突文を施すものをⅣ類（a，b）と分類した。これを層位的状況や分布，それに山陰地方の土器群などと関連づけてⅠa・Ⅱa・Ⅲa→Ⅰb・Ⅱb・Ⅲb・Ⅳa→Ⅰc・Ⅱc・Ⅲc・Ⅳbという3段階を想定し，異なる類型が併行しながら同時に変化するものとした（宮本 1989，1990）。

高橋信武はアカホヤ火山灰の直下にも注目を払い「単純な深鉢形」轟式土器を六つに分類した。これは右京西遺跡の発掘成果が根幹となるが（高橋 1986），ここで出土する三種の土器を分布域の違いから時期差として認識した。これに基づいて，円筒型平底器形を持ち条痕調整の後にさらに条痕文を加える鎌石橋式→板状施文具によって微隆起帯化される轟1式→微隆起帯を貼りつける轟2式という変化を想定した。これがアカホヤ火山灰下層の状況であり，上層ではミミズバレ状隆起帯と称される轟3式→地域差やミミズバレ状の変化がみられる轟4式→轟5式へと変遷を考えた。従って，「単純な深鉢形」は九州内で早期末の塞ノ神式との連続性が示されることになる。これに対して，「長頸を有し腹部の張った深鉢形」はアカホヤ火山灰上層の轟3・4式に「単純な深鉢形」と共存するといい，この系譜を山陰在地の土器に求めている（高橋 1990）。

このように最近の轟式土器の研究からみても，アカホヤ火山灰降灰を前後とする時期における「単純深鉢」と「屈曲型」の異なる器形の位置づけや系譜問題などが，複雑な状況の中でも重要な対象として取り扱われてきた。特に「屈曲型」器形は，先行様式が曖昧な条件下で突然出現し，型式変化も九州・山陰の両地域でほぼ同一様相を示している。従って，近年の各論考においても両器形の一系統説，共存変遷説，別系統説といった大きな違いが生じている。各論考については両器形の関係について詳しく対比されていないこと，屈曲型土器の系譜において根拠貧弱であることといった問題点が指摘できよう。

2) 山陰・山陽の土器の研究史

山陰地方で出土した土器を最初にまとめたのは山本清であり，各遺跡で採集された縄文土器の比較検討から「佐太講武式」を早期末前期初頭に，「宮尾式」を前期前半，「波子式」を中期中ごろとして位置づけた。宍道正年は，山本の研究をもとに，新たな資料として「佐太講武式」とは異なる九州の轟式系統の土器が含まれていることや押型文土器を認識するなど，さらに研究を進展させた（宍道 1974)。

足立克己は竹ノ花遺跡出土の土器を5類に分類し，山陰の現状に合わせ展開させることによって，出雲地方の縄文前期の土器様相をまとめようとした。前期前葉の様相として，古段階は口縁下に一条の隆起帯・肥厚口縁類・それに轟B式土器が伴うもので羽島下層式あるいは北白川下層Ⅰ式に，中段階はD字状の刺突文類で羽島下層Ⅱ式ないし鳥浜三群土器に，新段階は爪状文類で羽島下層Ⅲ式・鳥浜四群土器に相当するものとし，九州や山陽との関連性を明らかにしようとした（足立 1981)。

発掘の増加とともに資料の増えた時点で宍道正年は，西川津出土土器を中心とし，五つの型式に分類を試みた。西川津Ⅰ式は早期末の菱根式，Ⅱ式は前期初頭の轟B式系統，Ⅲ式は肥厚口縁帯に刺突・押引・貝殻文などを加えたいわゆる山陰的特徴を持つもの，Ⅳ式は条痕文の佐太講武式，Ⅴ式は前期前葉の連続爪形文の宮尾式，という見解が示された（宍道 1986)。この分類では各地域間の比較，各類の細分といった細かい見解までは示されていない。

次に山陽地方の研究史の状況を概略しよう。山陽地方では，かつて鎌木義昌らによって，早期末の土器として表裏条痕で胴部屈曲または口縁に段のあるものを羽島下層Ⅰ式とし，前期前半の土器は貝殻文とミミズバレ状凸帯を含む刺突文をⅡ式，さらに爪形文をⅢ式に位置づけた（鎌木・木村 1956)。ところが，間壁忠彦らは羽島貝塚や里木貝塚の土器の検討から，羽島下層式の細分は適切ではないとしている。その根拠としては，資料の少なさと同一層で出土することをあげており，また里木貝塚の様相からみて，Ⅲ式とされた爪形文が新しい要素であるとしてもⅠ・Ⅱ式の細分は無理があるものと考えた（間壁・藤田 1975)。この羽島下層式を一括とする考え方に対して潮見浩は，本州西北端地域の前期土器の研究で，比較資料の帝釈峡観音堂洞窟の土器を分析し，羽島下層式は口縁下に隆帯を巡らすものを主とする羽島下層（古）と刺突文・爪形文を主とする羽島下層（新）とに細分が可能であるとした（潮見 1980)。網谷克彦は鳥浜貝塚の北白川下層Ⅰ式土器を文様変遷で整理し，2連規制の働く刺突文は爪形文に先行するものとし，この要素は瀬戸内地方にも適用できるものとした。すなわち，羽島下層Ⅱ式併行から北白川下層Ⅰa式へと変化し，羽島下層式の3細分を認めている（網谷 1981)。中越利夫は山陽山間部の帝釈峡遺跡群の資料をまとめ，羽島下層（古）→羽島下層（新）→彦崎ZⅠ式へと変化を想定し，層位的にもある程度区分できるとしている（中越 1985)。

このように山陰・山陽では，羽島下層式をめぐる細分問題や九州との関連性を指摘しながらもその具体的な働きがなされていなかった。このランダムな状況をまとめたのが宮本一夫である。近畿

・瀬戸内・山陰において，羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱｂ式に至る型式変化は適合しているものと認識し，羽島下層Ⅱ式以前の土器群をどう考えるかということに問題を提起している。近畿では一乗寺南地点のあり方に注目し，南部を南東部と南西部とに二分する。南西部では羽島下層Ⅱ式以前のものとして隆起帯を特徴とするⅠ～Ⅳ式を置く。瀬戸内沿岸では羽島貝塚の資料を改めて細分し羽島下層Ⅱ式以前のものとして，口縁直下に一条の平行隆帯を施すものをA類，キザミ目平行微隆帯に縦隆帯を施すB類，胴部屈曲の上半に押圧した縦隆帯を貼りその両わきに押引文を施すC類，長方形状の施文原体によって押引文を施すD類と分類し，瀬戸内内陸部や山陰地方などにも適用し比較検討を行っている。その結果，瀬戸内沿岸にはＡ１類(口縁直下に一条の平行隆帯を施すもの)，山陰を中心とした地域はＡ２類(肥厚口縁部を持つもの)，九州から中国・近畿北部に分布するB類，B類の影響を受けて山陰で在地的に成立したというC類，近畿南東部の栗津湖底ＳＺ１群と近畿南西～北部・中国東部にかけて分布するD類という，いわゆる東海・近畿南東部から瀬戸内までの共通性と九州から山陰・近畿北部に至る共通性が対峙した状況が認められるとした（宮本 1987)。

井上智博は山陰地方の土器群を中心とし，口縁部肥厚帯を特徴とする「西川津A式」と隆帯を貼りつける特徴を持つ「西川津B式」とに分類した。また，型式学的変化によってそれぞれ１～３類を設定し，早期末～前期初頭の土器編年を「長山式」ａ・ｂ類→A式１類→A式２類・B式１・２類・A式とB式の折衷→A式３類・B式３類という４段階変化を想定した。その後，九州の轟B式の胴部が膨らむか屈曲する深鉢形にも若干の検討を加え，西川津B式と同一系統と見なした（井上 1991)。

3） 隆起文土器の研究史

韓国における隆起文土器は，単独で発掘を行ったのは新岩里遺跡のみであり，ほとんどの遺跡で櫛目文土器とされるものと共伴する。従って，戦前と戦後しばらくは両土器群が同じ範疇のものとして取り扱われてきた。戦前の研究は日本人研究者によるものであり，1930年代まで遡る。横山将三郎を中心とし東三洞貝塚で試掘を行い，出土土器を紐線文の名称を使い櫛目文土器と区別しているが，その位置づけは明らかではなかった。また，新石器時代の文化を三つの地域に分け，伝播経路を北鮮→南鮮→西鮮と波及するものと見なした（横山 1933)。及川民次郎は東三洞貝塚で得られた土器の内，隆帯と隆起によって構成される文様を持つ土器群に対して「隆起文土器」という型式名を与え，この隆起文土器が南九州の影響下で成立したものと考えた（及川 1933)。このように，戦前から土器文化の系譜に対立が生じており，外部から影響を求める傾向が強かった。

戦後，発表された佐藤達夫の論考では，韓国各地の有文土器を中心とし，地域的に捉えた編年を立てている。韓国南岸の慶南地域においては４類に分類され，隆起文土器が刺突文・沈線文・刻文類よりも新しい段階に属するものとした。ところが，この編年案はL. Sampleらの東三洞貝塚の層位的発掘によって否定された。しかし，この論考は韓国有文土器を東アジアの中に位置づけようとする意図と，層位的データのない当時における型式学的な編年観としては大いに評価される（佐藤

1963)。

L. Sample は，東三洞貝塚でA・B地点を設け，試掘を行った。この二つの地点を合わせた形で朝島期→牧島期→釜山期→頭島期→影島期という層位的変化を捉えている。これにはB地点最下層の朝島期とA地点最下層の釜山期の層位関係に問題点が指摘されるが，全体の流れとしては従来の観念を破り，隆起文土器が瀛仙洞式以降の土器よりも先行する土器群であることを明らかにした(L. Sample 1974)。

L. Sample の試掘以降，中央博物館が東三洞貝塚の全面発掘を行った。金元龍はこの発掘資料を基に，最下層の東三洞Ⅰ（隆起文・押捺文など），中間層の東三洞Ⅱ（典型的な櫛目文土器），上層の東三洞Ⅲ（変形櫛目文）と編年を行い，この内東三洞Ⅰの隆起文土器に関しては大陸と文化的つながりを持つものと考えている（金元龍 1973, 83, 89)。

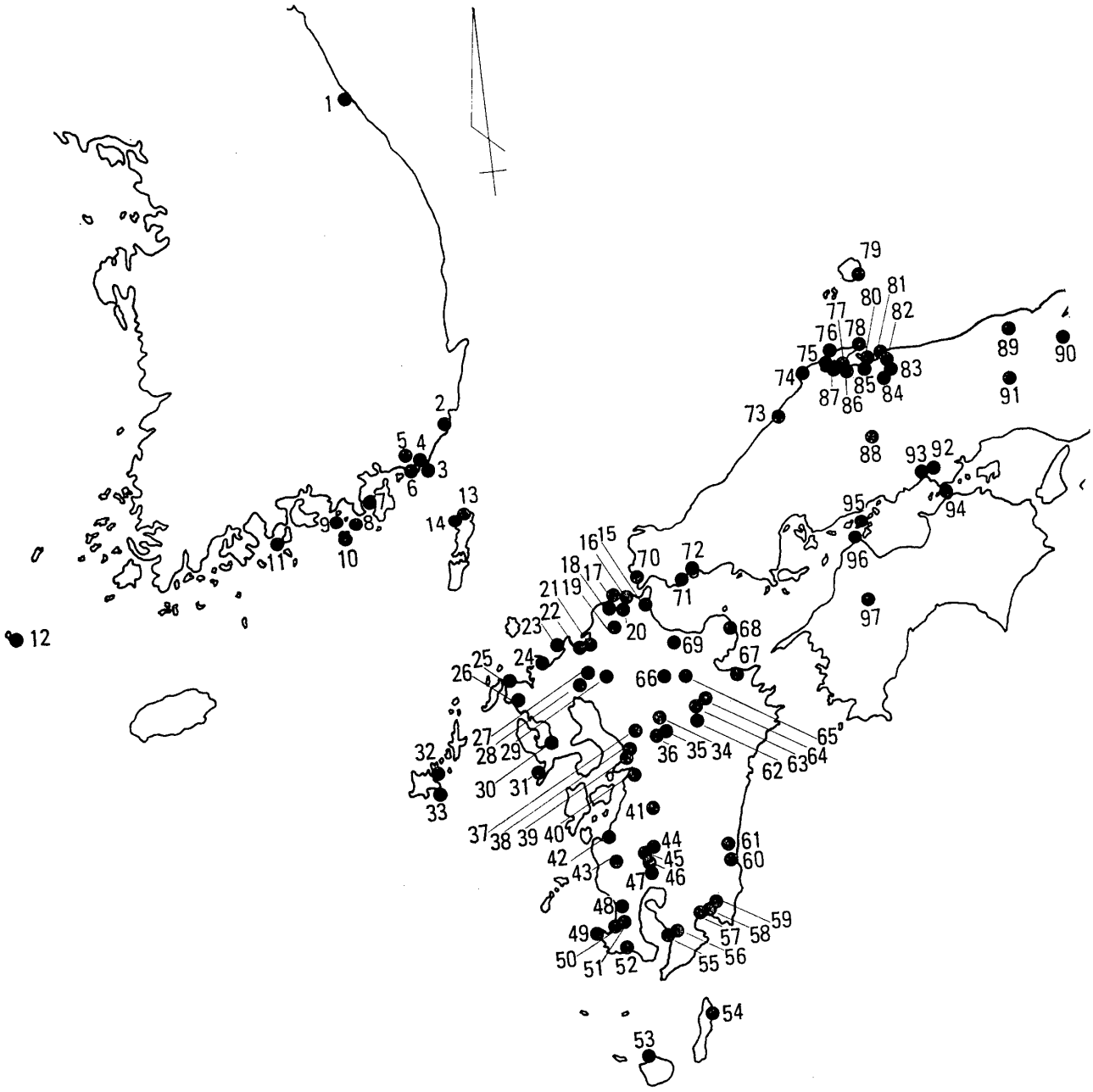
広瀬雄一は韓国南岸の新石器時代土器の全般にかけて研究を進めてきたが，隆起文土器に係わる論考を概略したい。1984年の研究では1～4類に分類し，文様帯区画と文様要素からⅠ～Ⅲ段階に編年を行った。すなわち，文様帯区画は口縁文様帯→口縁＋胴部文様帯→胴部文様帯に，文様要素は三角隆線→カマボコ隆線→隆帯・沈線文へと変化するという。また，隆起文Ⅰ段階に轟B式後半の土器が流入し，Ⅱ段階では南岸と東海岸の二つの地域に分かれ，Ⅲ段階では刺突文系土器の南下を想定している。1985年には任孝宰などの隆起文土器の「南下伝播説」の論考に問題点を指摘しており，その点を踏まえ隆起文土器の分類と変遷を考察している。隆起文土器を鰲山里と南岸タイプに分け，それぞれ3段階に細分し，南岸では隆起→隆帯への変化を確かめている。1989年には今までの韓国南岸の新石器時代前期の研究成果をまとめ，従来通り隆起文土器の3段階分類・変遷を再確認している。1990年には韓国南岸と九州側の屈曲型土器を用いて比較検討を行った。屈曲型土器は轟B式土器の北上によるものであり，北上の後はそれぞれ異なる変遷過程を経ているものと考えている。この比較では，屈曲型土器が隆起文Ⅰ段階より瀛仙洞式Ⅱ段階まで存続すると考えられている（広瀬 1984, 85a, 89, 90)。

小原哲は隆起文土器の分類の際，比較的具体的な属性分析を用いて隆起の形状と文様モチーフとを組み合わせて編年を立てている。ここで隆起文土器にⅠ～Ⅲ段階を設定し，隆起線文→隆起帯文→隆起文＋沈線文へと変化を想定している。また，隆起文Ⅰ段階より深鉢形と壺形土器がセットとして櫛目文土器まで後続すると見なし，壺形土器を欠く轟B式土器の北上説を否定した（小原 1985)。

鄭澄元は韓国南岸地域の隆起文土器を，文様構成より6類に分類しており，その系譜をアムール川中流域に求めている。大陸と韓国南岸の中間的な鰲山里を介して伝わったということを，南岸での隆起文土器のあり方で証明している。韓国南岸地域の隆起文土器は，1段階の隆起帯・隆点列文→2段階の隆起線文（鰲山里式）→3段階の隆起線文（南岸式）→4段階の隆起線＋沈線文という編年を想定した（鄭 1985)。

宮本一夫は韓国の新石器時代を六つの地域に分け，地域別に土器編年を試みた。南岸においては

縄文前期前半期における轟B式土器群の様相



1.鰲山里　2.新岩里　3.東三洞　4.瀛仙洞　5.凡方　6.多浦　7.山達島　8.煙台島　9.上老大島
10.欲知島　11.突山松島　12.黒山島　13.越高　14.越高尾崎　15.貫川　16.黒崎　17.山鹿　18.新延
19.目尾　20.楠橋　21.柏原　22.四箇　23.天神山　24.菜畑　25.つぐめのはな　26.岩下洞穴
27.六本黒木　28.船塚　29.野口　30.伊木力　31.深堀　32.堂崎　33.大板部洞窟　34.瀬田裏
35.谷頭　36.桑鶴土橋　37.竜田陣内　38.曽畑　39.轟　40.岩立C　41.狸谷　42.荘　43.大畝町園田
44.山崎B　45.花ノ木　46.山神　47.桑ノ丸　48.黒川洞穴　49.西之薗　50.阿多　51.上焼田
52.永野　53.一湊松山　54.下剥峰　55.榎木原　56.鎮守ケ迫　57.野久尾　58.片野　59.鎌石橋
60.赤坂　61.内野々　62.右京西　63.下菅生B　64.三反田　65.二日市洞穴　66.平草　67.横尾
68.羽田　69.枌洞穴　70.神田　71.月崎　72.美濃が浜　73.久根ケ曽根　74.菱根　75.後谷
76.佐太講武　77.西川津　78.含霊塔下　79.宮尾　80.目久美　81.鮒ケ口　82.上福万　83.下山南通
84.長山馬籠　85.陰田　86.竹ノ花　87.タテチョウ　88.帝釈峡遺跡群　89.神鍋山　90.志高
91.皆木神田　92.羽島　93.島地　94.大浦浜　95.大見　96.江口　97.上黒岩

図1　縄文前期前半期の主な遺跡

層位的な検討と諸論考の問題点を取り上げており，L. Sample の層位に従い5期に区分した。朝島期の隆帯文→牧島期の隆起文→釜山期の刺突・押引・沈線文という編年観を持ち，さらに釜山期を古・中・新段階に細分した。また，半島の土器を東アジア的観点から把握し，南岸において隆起文・刺突文段階にはアムール川→東海岸→南岸，櫛目文土器の直前段階には遼東方面→西海岸→南岸というルートを想定した（宮本 1986)。

任孝宰は轟B式の北上説を，文様とC^{14}年代によって否定しており，隆起文土器の時期に半島から九州への影響が，曽畑式土器へも櫛目文土器の直・間接的な影響があったと考えている(任 1986)。

このように，韓国南岸において隆起文土器を主とする新石器時代前期の研究史を概略した。現在の編年は全般的に隆起文→刺突文・押引文・沈線文→櫛目文という変遷が通用されており，細分や位置づけ問題において諸研究者の意見が異なっている。しかし，隆起文土器と轟B式土器に関しては具体的に対比されておらず，韓国南岸での轟B式の「屈曲型」土器のあり方についてもあまり述べられていない。それに隆起文土器の大陸からの南下説，轟B式の北上説といった細かい問題については，まだ検討の余地が多く残っている。

III. 轟B式土器の分類と編年

1) アカホヤ火山灰（Ah）直下の轟式土器の現況

近年調査の進展に伴い，轟B式土器がアカホヤ火山灰の直上から出土することが分かってきた。ところが，アカホヤ火山灰直下から出土する轟式土器の問題は詳しく触れられていない。この原因は，Ah直下の轟式土器を出す単純遺跡や資料の少なさにあるものと思われる。現在知られているAh直下から轟式土器を出土する主な遺跡としては，右京西・下菅生B・狸谷・鎌石橋・山神・花ノ木・内野々遺跡などがあげられる。この内，右京西と下菅生B遺跡ではAh直下の轟式土器にみられる諸属性が集合しているように思われる。わりとまとまって出土した右京西や下菅生B遺跡では，単純深鉢を呈し微隆起帯を貼りつけるもの（図 2.1～5)，円筒形平底の器形からなり板状施文具による微隆起帯化されるもの（図 3.12,14)，単純深鉢に平底を呈し条痕文のみを施すもの（図 4.20～22,24）などが主体をなしている。これらの土器群はアカホヤ火山灰直上の轟B式の土器群と関連を持つのだろうか。この問題に関する最近の研究状況をみると，アカホヤ火山灰直下の平底の条痕土器群を轟B式土器群の祖形とする高橋信武の説（高橋 1989)，高橋論文のアカホヤ火山灰直下の轟1・2式土器群に対していくつかの問題点を指摘する宮内克己の見解（宮内 1990)，条痕土器群と轟B式土器群とで異なる属性を提示し平底深鉢の条痕土器を轟B式土器群と分離して考えようとする宮本一夫の見解(宮本 1990)などがある。Ah直下の轟式土器の内，右京西遺跡を分析した高橋は，平面分布による出土地点の違いから，板状施文具による微隆起帯化→貼りつける微隆起帯という変化を想定している。ところが，板状施文具によって微隆起帯化されるものは，器形や施文技法・器面調整などにおいて微隆起帯を貼りつけるタイプとは明らかに異なるものであり，これを同一系統にしても良いものかどうか疑問が残る。この板状施文具により微隆起帯化されたもの

は轟B式へ移行せず，アカホヤ火山灰直下層で消滅するものと考えられる。むしろ，微隆起帯を貼りつけるものや条痕のみを施すものが轟B式土器と関連を持つ可能性がある。

Ah直下の轟式土器は上述した通り，大きく三つに分けられる。微隆起帯を貼りつけるものをA類，板状施文具によって微隆起帯化されるものをB類，条痕のみを施すものをC類として詳述しよう。これは高橋信武の轟1・2式土器に該当するものである。

A類（図2）は，貝殻によって器面調整を行ったため条痕が器面に残り，その上に細い粘土帯を貼りつけ整えたものである。文様構成としては口縁部を中心としたところに横微隆起帯を施したも

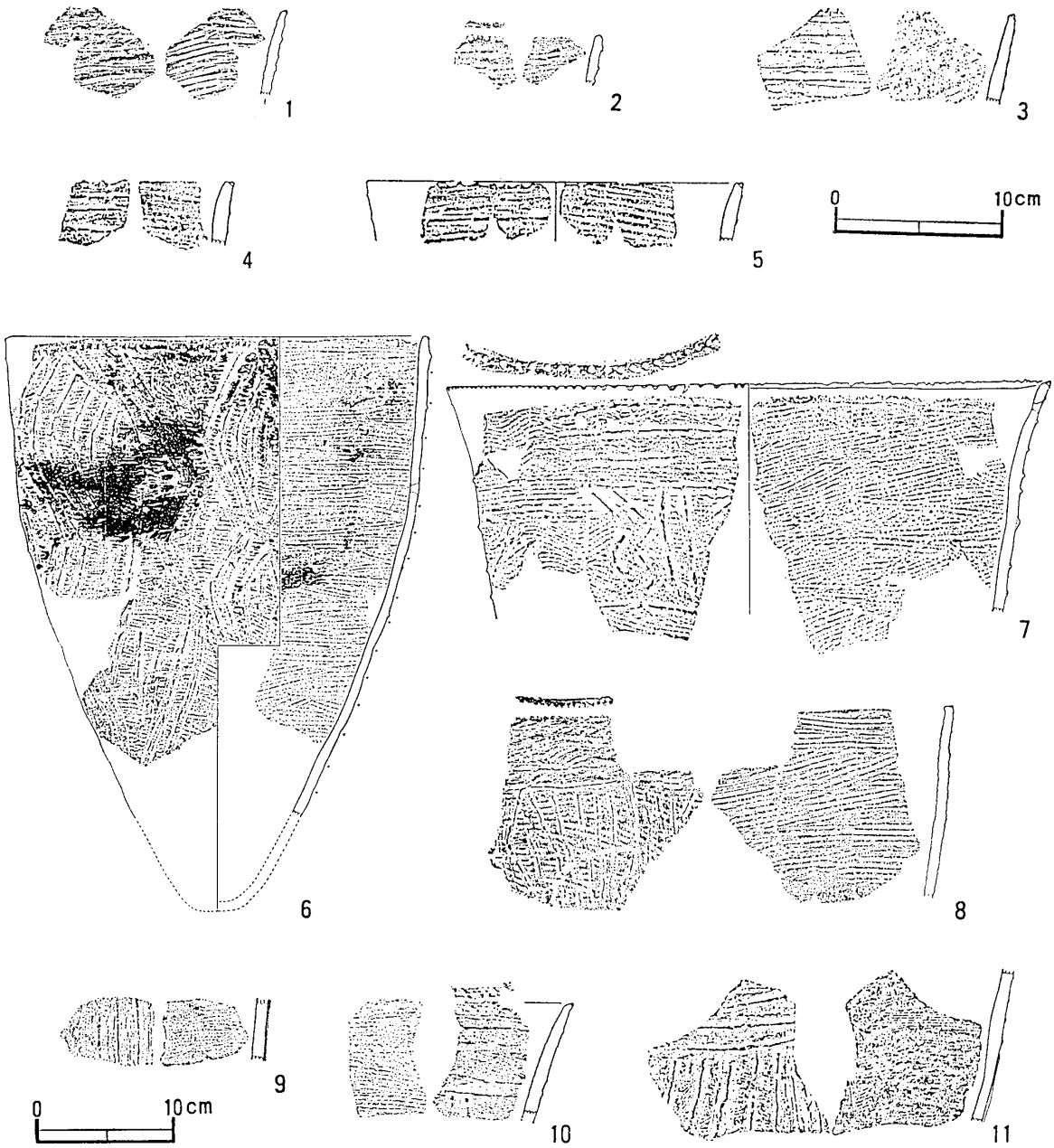


図2　Ah直下の轟式土器A類　　右京西1・2，下菅生B3～5・9・11，大板部洞窟6・7，轟8，つぐめのはな10

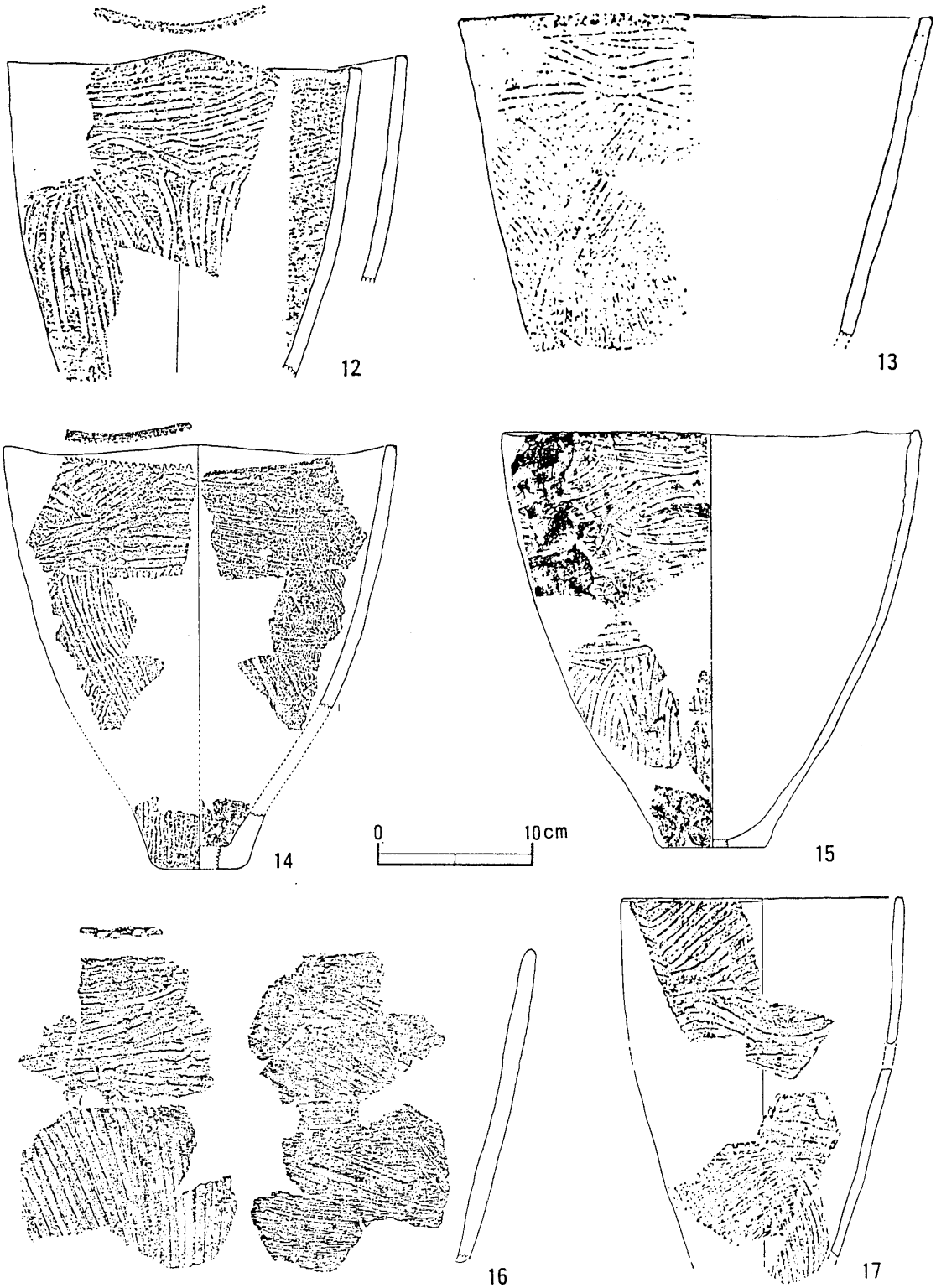


図３　Ａｈ直下の轟式土器Ｂ類　　下菅生Ｂ12，赤坂13，右京西14，山崎Ｂ15，山神16，狸谷17

のや口縁部の３～５条の横微隆起帯に縦微隆起帯が組み合わされるものがみられる。また，大板部洞窟の出土品のように縦微隆起帯が同心円状菱形を呈するものもこの範疇に属するものと思われる（図 2.6)。このＡ類は隆起帯の属性によって将来的には細分できるものと思われる。器形はほとんどが小片であるため全体の様相は分からないが，アカホヤ火山灰直下の出土状況を示す右京西・下菅生Ｂ遺跡の例からみれば，単純深鉢で平底を呈するものと思われる。主に北部九州以外の地域に分布している。この類で層位的にアカホヤ火山灰の直下として確認された例としては，右京西・下菅生Ｂ・花ノ木遺跡などがある。

Ｂ類（図３）は，器面調整がＡ類の貝殻による条痕とは異なり，板状施文具によるものである。器面調整をした後，口縁部を中心として板状施文具で横方向にナデを行うが，この際にこれが太めの条痕に文様化されるもの（図 3.12）と条痕によって微隆起帯化されるものとがある（図 3.13～17)。微隆起帯は，横方向施文または波状の施文などがランダムに施され，胴部以下は縦・斜方向に条痕を残す。器形は円筒形の深鉢を呈し，口縁部は波状をなすものもある。このＢ類は施文において条痕から微隆起帯へと，文様は口縁部中心が胴部まで広がり，それぞれ時間的推移が考えられ

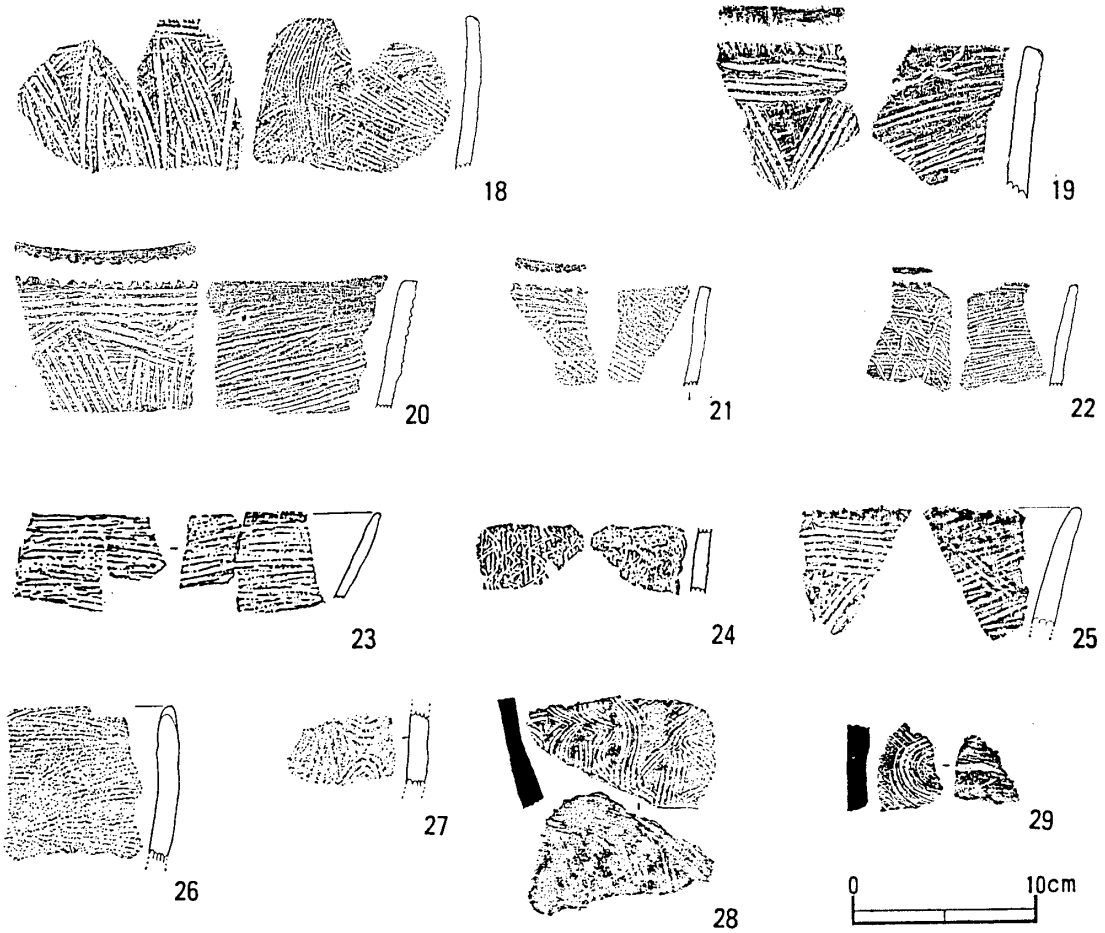


図４　Ａｈ直下の轟式土器Ｃ類　轟18・19，右京西20～22，大板部洞窟23，下菅生Ｂ24，平草25，岩立Ｃ26・27，片野28・29

るものであり，細分が可能である。この類の分布域は，大分県・鹿児島県・熊本県の内陸部である。アカホヤ火山灰の直下層として認定されたものには，右京西・下菅生B・狸谷遺跡などがある。

C類（図4）は，貝殻による器面調整のため器面に条痕が残るものと，更にその上に条痕を加えるものとがある。前者は右京西遺跡の例から見れば平底の単純深鉢と思われ，器面調整の条痕の方向は一定ではない。後者は前者と似るが，文様化した条痕は波状・同心円状・複合条痕など多様であり，器形は単純深鉢が主体をなすものと思われる。この類は型式学的認定が難しいものである。但し，前者はアカホヤ火山灰の上層の轟B式土器群の中でも多く出土するので，火山灰上層への連続性の少ない後者の方が古い可能性を示唆する。アカホヤ火山灰の下層の層位的根拠を示す遺跡としては，右京西・下菅生B・内野々・鎌石橋遺跡などがある。

以上のように，Ah直下の轟式土器を大きくA～C類に分けて概略したが，このA類の隆起帯を貼りつける手法・口縁部中心の文様構成・縦隆起帯の存在・貝殻による器面調整といった属性は轟B式土器にもみられ，関連を持つものと思われる。また，C類の貝殻による器面調整のみのタイプも轟B式で多くみられる。B類の板状施文具による微隆起帯化の技法は，轟B式土器ではみられないことから，移行の条件から外されよう。

2）轟B式土器の分類

まず，縄文時代前期の中で轟B式土器群の位置づけを触れておこう。鬼界カルデラの噴火は大量の火山灰を積もらせ，気候や植生など自然環境に大きな変化をもたらした。最近の研究では，アカホヤ火山灰降灰が縄文早期と前期の境界付近の年代に相当することが分かった。これによって，この火山灰の直上から出土する轟B式土器群は，縄文前期の始源から存在することになる。轟B式の次の段階である野口・阿多タイプ土器群に刺突文・押引文・沈線文様が加わる前まで，轟B式土器の属性が確認できる。従って，轟B式土器群は縄文前期の前半期に設定されている。

轟B式土器群は九州を中心とし，山陰地方や韓国南岸でもみられるものである。この土器群は広域に分布するのであって，地域性もあり，器形や文様においても多様である。轟B式土器群は，器形と文様によって五つに分類され，それぞれ細分できるものである。

轟B式A類：隆起帯を横方向に貼りつけるもの。

A1（図5）は，貝殻による器面調整が行われ，器形は単純深鉢のものと思われる。口縁の形は外開きが多く，文様はミミズバレ状の隆起帯を横方向に多条巡らす。文様の中心は口縁部にあるため隆起帯文の間隔は非常に狭い。このミミズバレ状隆起帯を施す手法は，指先で摘みながら貼りつけるものと隆起帯を貼りつけながら指先でナデ調整をするものとがあり，前者は主に中・南九州でみられ，後者は北部九州地域に分布するようである。この類の分布域は九州全域はもちろん山口県南部までみられ，小片としてはもっと広がるようである。

A2a（図6）は，器面調整や器形はA1と似るが，文様構成が多様である。ミミズバレ状隆起帯は，巡らす本数が5条以内となり，口縁部を中心に縮小される。波状隆起帯の単独，あるいは組

図5　轟B式A1類　　貫川1，羽田2，轟3・6，曽畑4，瀬田裏5，阿多7，三反田8，桑ノ丸9，上焼田10，荘11

み合わせが加わるが，これらの土器は北部九州・東九州北側に主にみられる。黒崎貝塚のものは隆起帯の本数が5条以上であるが，波状隆起帯がみられることでこの類にしておきたい（図6.15)。隆起帯に刻み目を施す属性はC類の影響であろう。A2b（図 7.30,31）は，砲弾型器形に近く丸底を呈するものであり，口縁はやや外開きである。この器形はA類の単純深鉢の変形であろう。いずれもミミズバレ状隆起帯からなり，口縁部と胴部を区画するものである。しかし，A類の破片では胴部にも隆起帯が付くのかどうかは区別できない。

A3a（図8）は，器面調整においてA2より貝殻による条痕の程度が弱まる土器が多くみられる。隆起帯においても，ミミズバレ状隆起帯がなくなり，くっきりした隆起帯が用いられる。波状隆起帯は退化への変化がみられ，隆起帯にキザミ目を施すタイプも隆起帯の本数がさらに減り，粗

雑さが感じられる。特に，尖底深鉢器形を呈するものが南九州にみられるが（図 8.49,50），地域的特徴であろう。Ａ３ｂ（図 7.32,33）は，器形や文様の区画隆起帯は継続されるが，隆起帯の本数において変化がみられる。隆起帯もミミズバレ状隆起帯ではないくっきりした隆起帯が現れる。分布域はＡ２ｂとともに北部九州に限られる。

このＡ類は宮本一夫のＩ類に該当するものであり，Ａ１→Ａ３への変化としては，器面調整にお

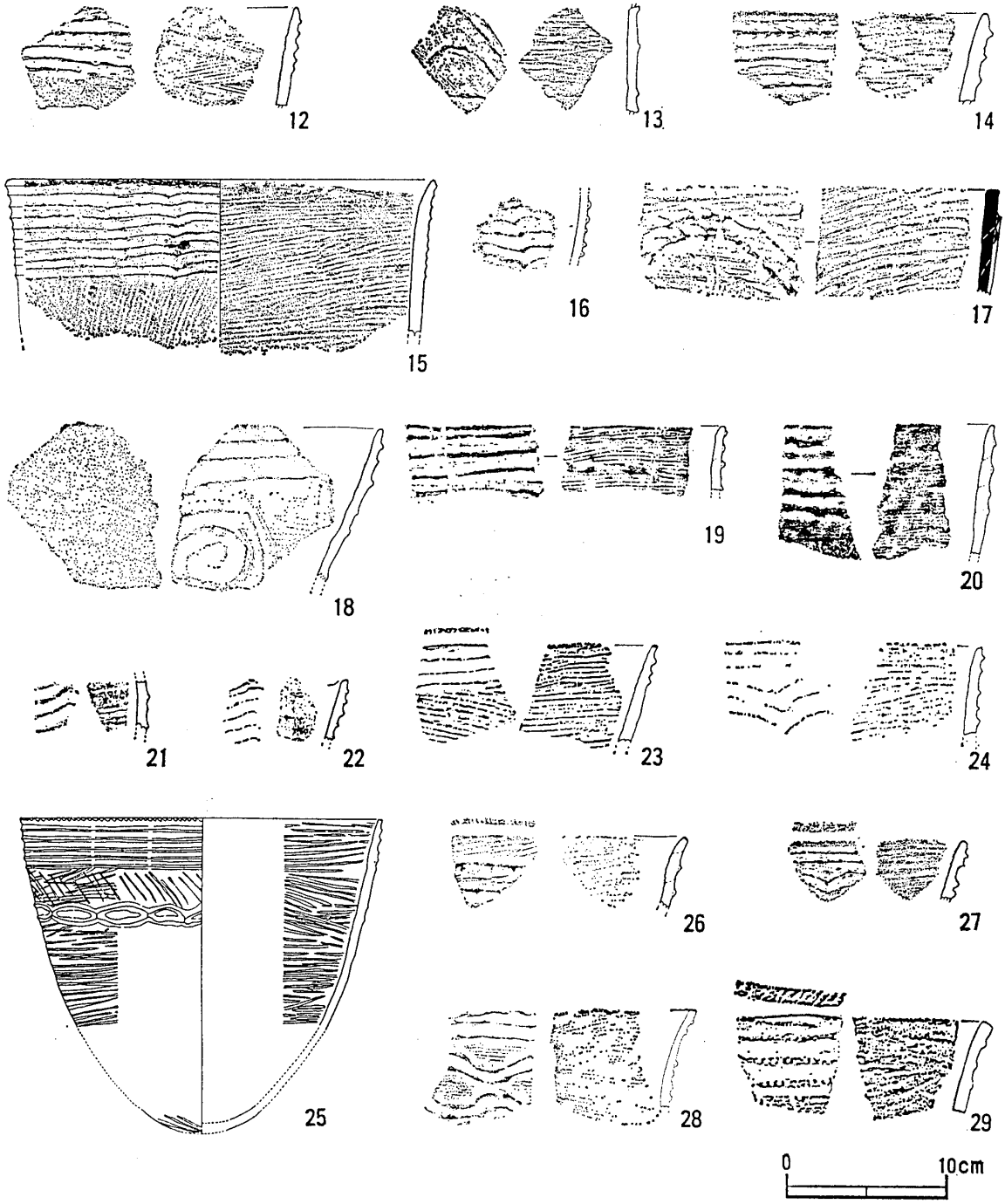


図６　轟Ｂ式Ａ２ａ類　　楠橋12～14，黒崎15，六本黒木16，轟17，貫川18，天神山19・20，新延21，羽田22～24，二日市25，曽畑26，三反田27，野久尾28，土光29

いて貝殻による条痕の程度がＡ３では弱まること，ミミズバレ状隆起帯が多条→５条以内に，Ａ３ではミミズバレ状隆起帯の消滅といった変化が想定される。また，Ａ１ではＡｈ直下の轟式土器のＡ類の微隆起帯の貼りつけ技法が漸移的変化によってミミズバレ状隆起帯として定着するものと考えられ，Ａ３ａでは野口・阿多タイプの古い段階との関連性が窺える。分布域は九州全域に見られるが，Ａ２ａ以降には，波状隆起帯を持つ土器が北部・東九州一帯に，尖底深鉢器形を持つ土器が南九州に，それぞれ地域的特徴として存在する。また，北部九州で主体となる砲弾型器形を持つＡ２ｂ・Ａ３ｂは，Ａ２ａ・Ａ３ａとほぼ同一変化を示し，次段階である野口・阿多タイプにつながるものである。

轟B式B類：縦隆起帯からなるもの。

Ｂ（図９）は，貝殻による器面調整であり，外開きの口縁，単純深鉢が主体となるものと思われる。文様はミミズバレ状の縦隆起帯を基本とするものである。縦隆起帯は，微隆起帯的要素がみられることや文様間の幅が狭いことから，Ａｈ直下の轟式土器のＡ類の影響を受けているものと考えられる。このＢ類はミミズバレ状隆起帯の衰退から複合隆起帯へとの変化が想定できるが，少ない資料や小片であるためＣ類的要素である胴部に屈曲があるかどうかという問題などがあり，細分は

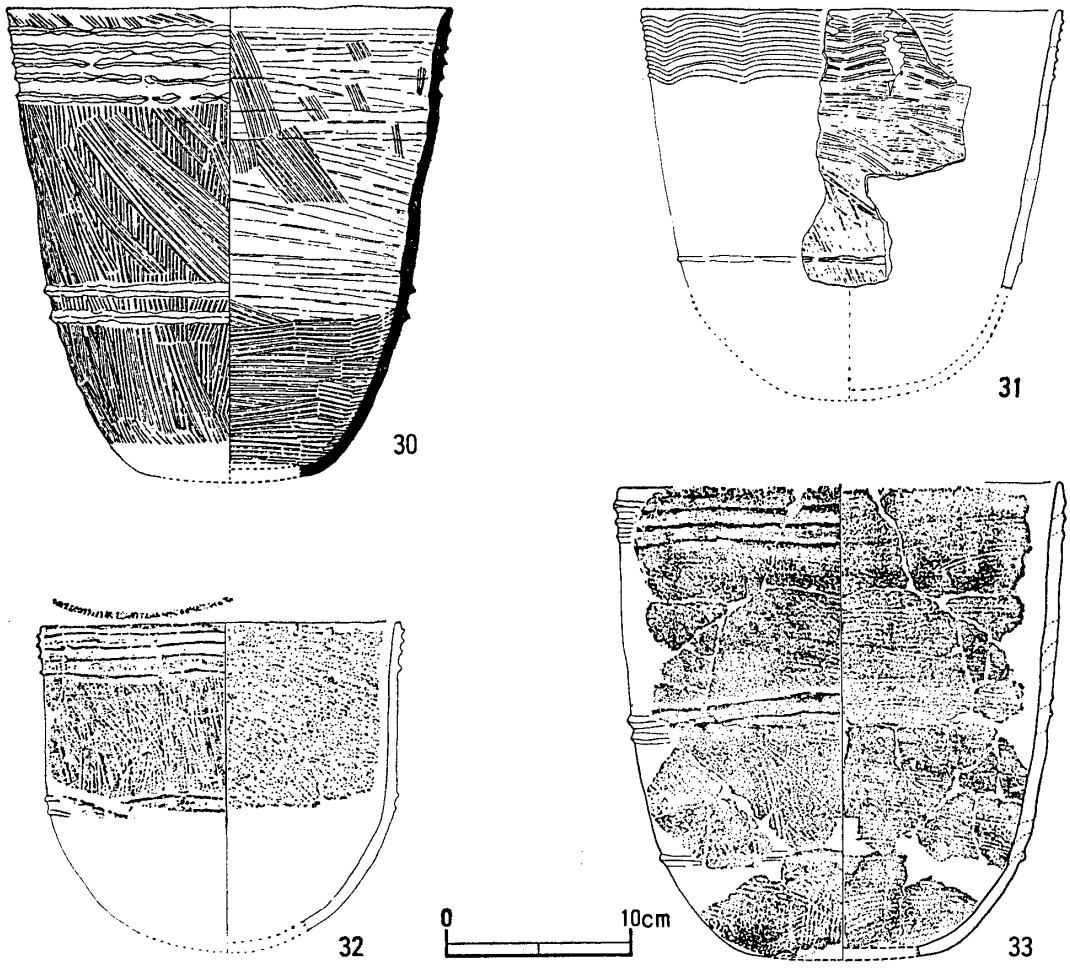


図７　轟B式Ａ２ｂ・Ａ３ｂ類　　山鹿30，羽田31・32，野口33

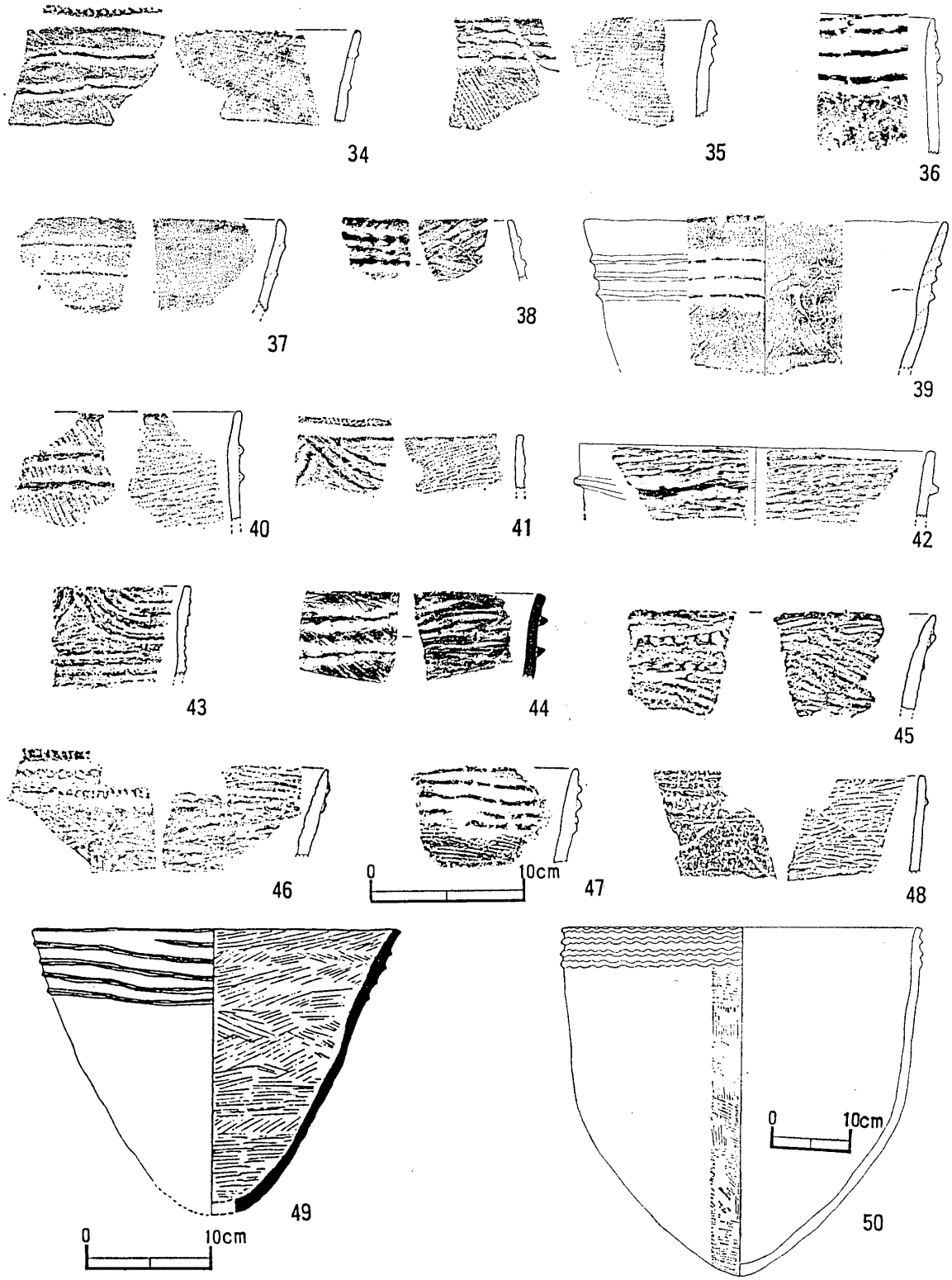


図８　轟Ｂ式Ａ３ａ類　　楠橋34・35，四箇36，貫川37，伊木力38，野口39，瀬田裏40・41，曽畑42，新延43，轟44，桑ノ丸45，大畝町園田46，阿多47，榎木原48，黒川49，一湊松山50

現在のところできない。分布域は，長崎県から熊本県・鹿児島県内といった西南九州および西北九州に集中する。これは後ほど触れるが，轟B式C類とほぼ同一の分布域を示すものである。

轟B式C類：屈曲型器形，多様な隆起帯からなるもの。

C1（図 10.1〜4）は，貝殻による器面調整であり，平底深鉢である。器形において胴部付近で段をなす屈曲型土器である。この類は屈曲する部分の角度が急であるもの・緩慢であるもの，または，屈曲部分が胴部の上部にあるもの・下部にあるものなど様々である。このC1は屈曲の角度が急である。文様は渦巻状隆起帯やミミズバレ状の縦横隆起帯などが組み合わされ幾何学状文様となる。ここで幾何学状の文様を構成する縦方向のミミズバレ状隆起帯は，B類と関連をもつ属性であろう。このB類を介し，C類として定着するようである。従って，B類はA類とC類の中間的立場にあるといえる。

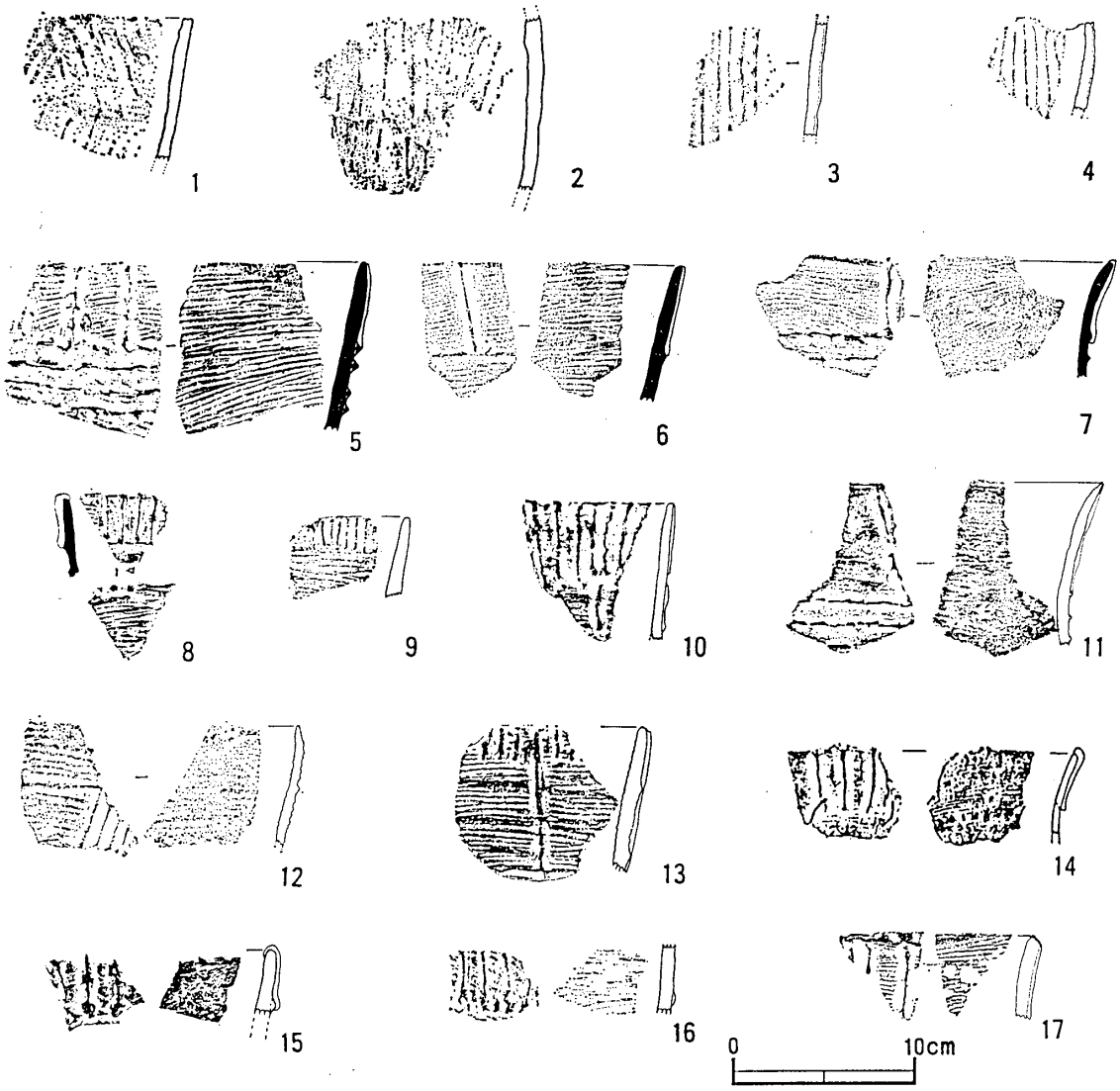


図9　轟B式B類　　つぐめのはな1・2，堂崎3・4・12，轟5〜7，片野8，荘9・10・13，柏原V11，桑鶴土橋14，曽畑15，鎮守ケ迫16，野久尾17

C２(図 10.5～12) は，C１より屈曲の程度が緩やかになり，渦巻状を中心とする幾何学状隆起帯がなくなるものである。文様は，縦隆起帯と横隆起帯の組み合わせによるものであり，横隆起帯は刻み目を施されるものが多い。やはり，C１を踏襲するものと考えられる。分布域はC１とともに中九州が中心となる。特に，沿岸の貝塚遺跡に多く，五島列島の堂崎遺跡でも出土し，海との強い関連性が窺われる。

C３（図11）は，屈曲の角度が非常に緩やかになるものである。この類では器形がほぼ完全に退化し，屈曲のイメージのみを残すものもみられる。文様も粗雑さが目立つ。野久尾遺跡の波状尖底深鉢は南九州の特殊的なものとして存在するが，C３と分類しておきたい(図 11.15)。分布域は中九州が中心となるが，退化した形で西北九州の伊木力・柏原遺跡・遠賀川流域や東九州の下菅生B

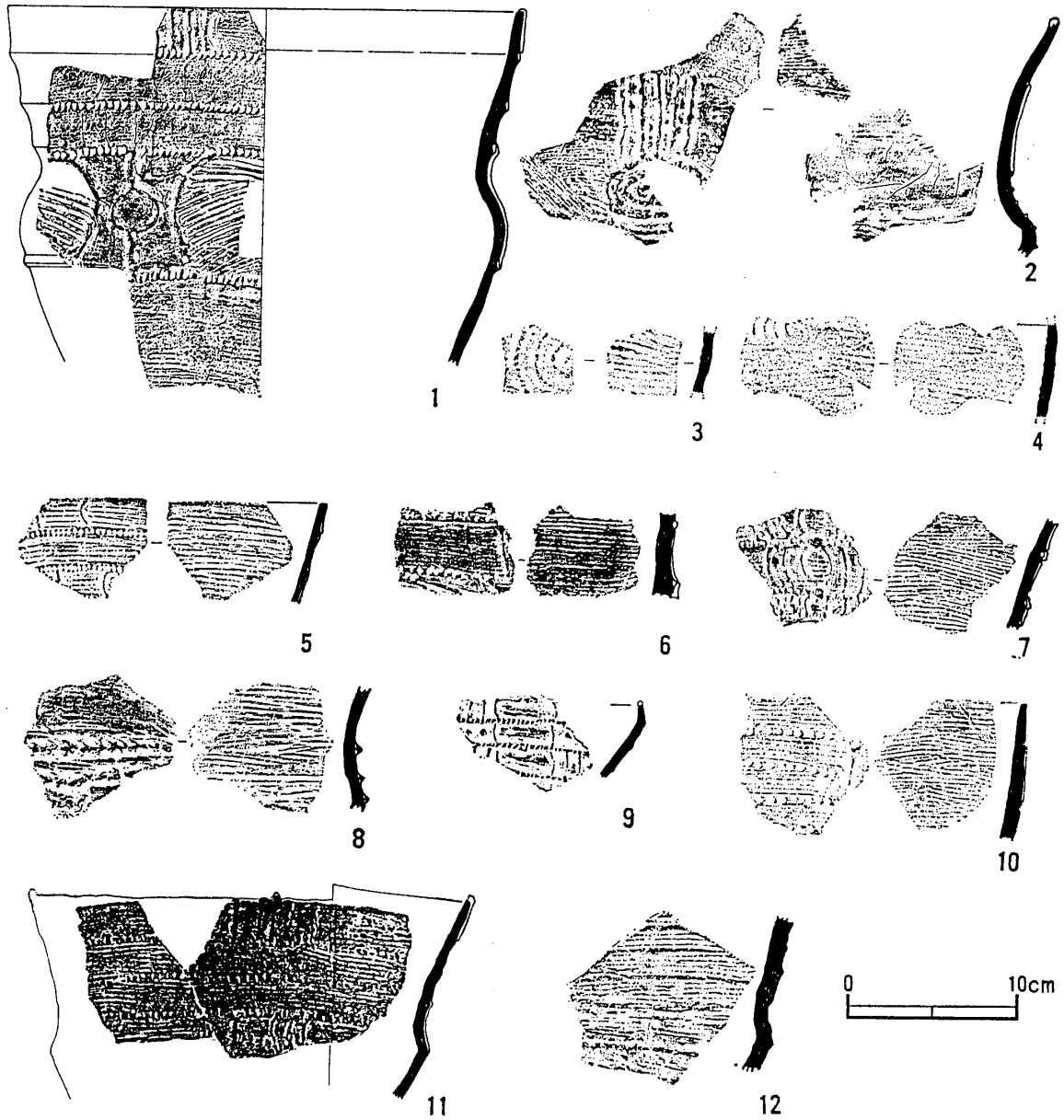


図10　轟B式C１・C２類　　轟１・２・５～８，堂崎３・４，荘９・11・12，大畝町園田10

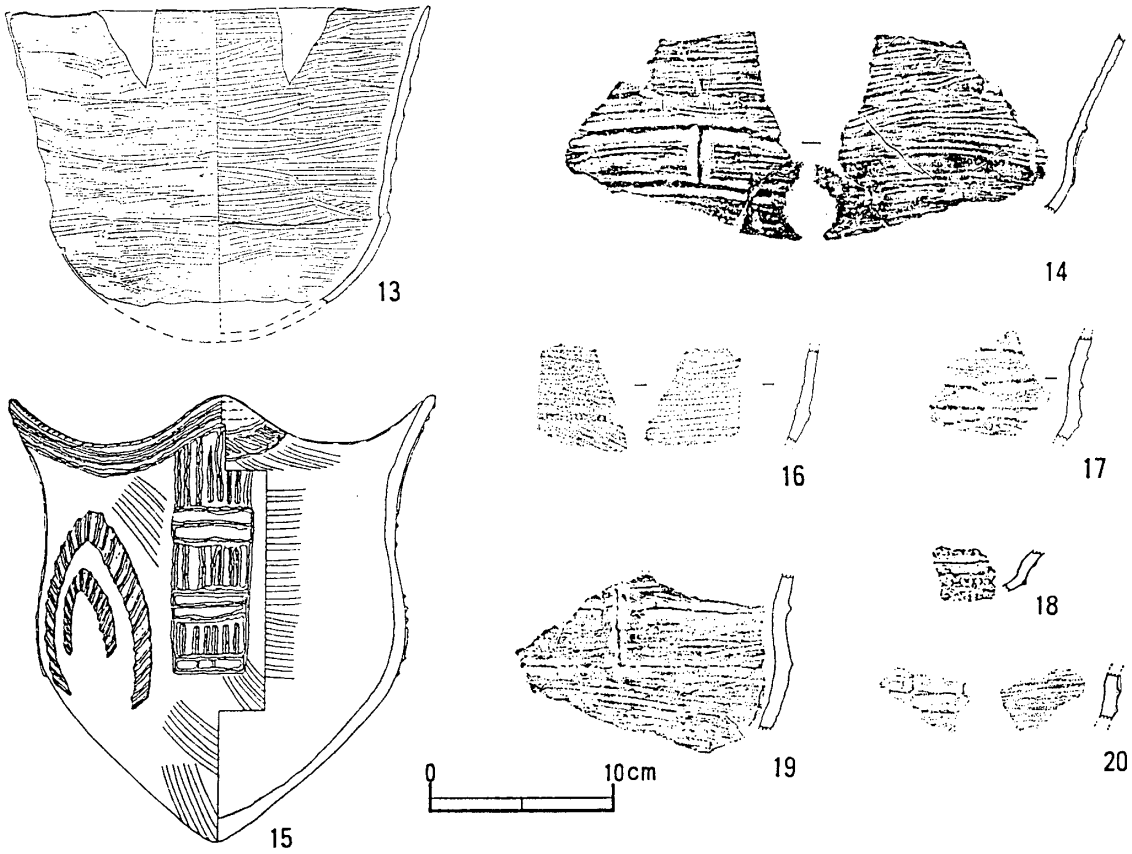


図11　轟B式C３類　　伊木力13，柏原Ⅴ14，野久尾15，堂崎16・17，下菅生B18，荘19，曽畑20

遺跡まで広がる。

このC類は宮本一夫のⅢ類・高橋信武の山陰系突帯文土器に属するもので，型式学的変化は，最も特徴のある屈曲型器形と隆起帯にある。屈曲型器形は屈曲角度の急なもの→緩やかなもの→退化したものへ，隆起帯は幾何学状隆起帯→複合隆起帯へと変遷が辿れる。分布域は九州はもちろん山陰・山陽地方や韓国南岸まで達し，広域にわたるものである。

轟B式D類：胴張型器形，隆起帯および刺突文からなるもの。

D１（図 12.1～5）は，胴張型器形で，屈曲型器形の変形であろう。貝殻による器面調整であり，文様構成は渦巻状を基本とする幾何学状隆起帯を施すものである。沈線状の条痕が加わる違いがあるものの幾何学状隆起帯が基本文様となるのでC1と同一系統と見なしたい。この類の分布域はC1とともに熊本県と鹿児島北部である。

D2（図 12.6～19）は，複合隆起帯を基本とし，幾何学状の隆起帯はみられない。縦隆起帯やミミズバレ状隆起帯の伝統も残す。山陰地方でみられる刺突文が加わる（図 12.9, 10, 17～19）。分布域はD１と同一であるが，轟B式の新しい段階では西北九州まで広がる。この類は，型式変化においてC類とほぼ同一様相を示すものである。

これらの他に，条痕のみを基本とするものがあるが，内外面に条痕のみを施すものと，更に条痕

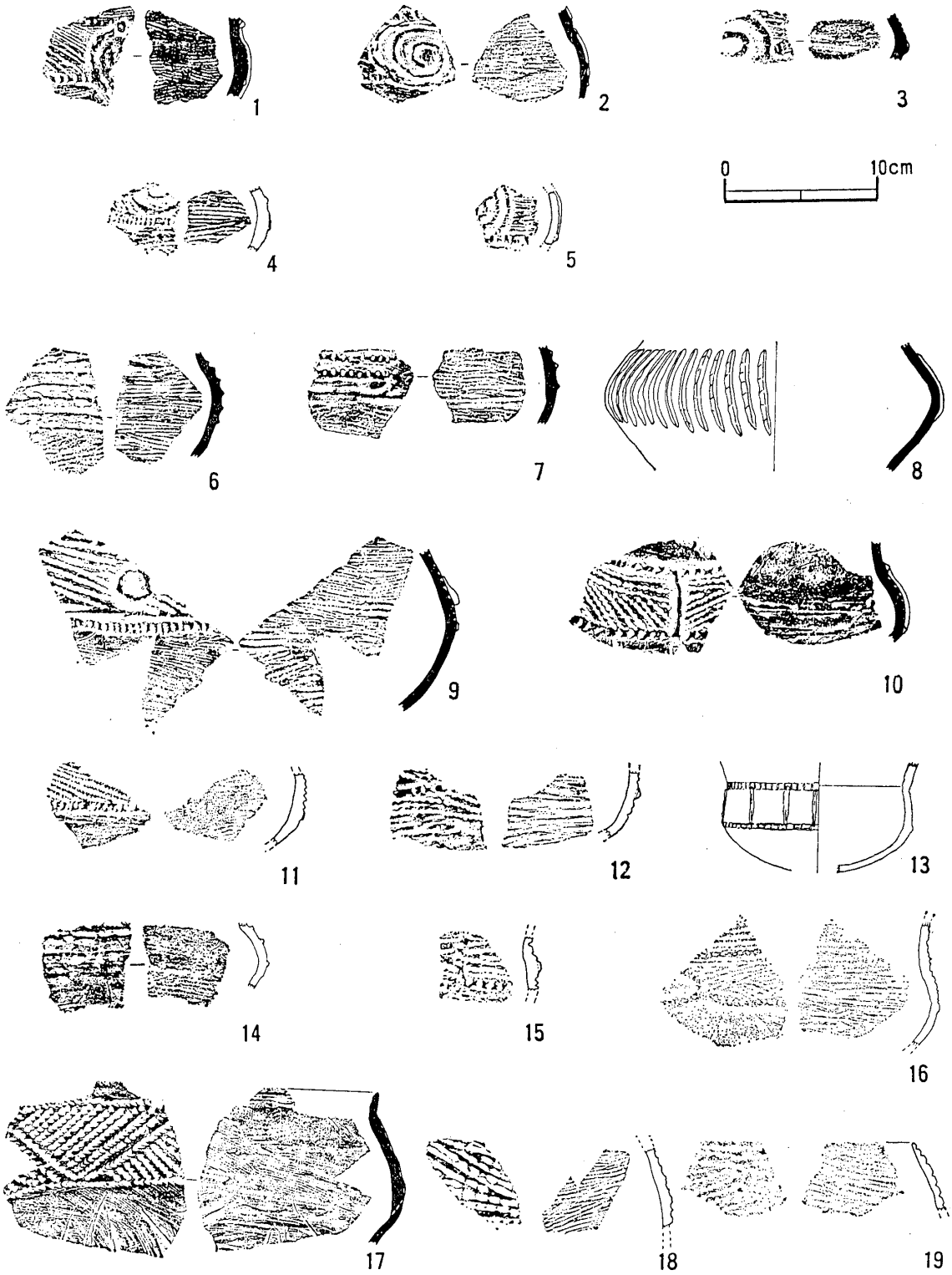


図12　轟B式D１・D２類　　轟１～３・６～10・17，大畝田園田４，荘５・13，曽畑11・12・18・19，柏原Ⅴ14，竜田陣内15，貫川16

の上に縦・斜方向・山形文などの文様を施すものとがある。後者はＡｈ直下の轟式土器のＣ類ほど多様ではないが，それらＣ類の属性を受け継ぐものである。分布は九州全域に広がり，単純深鉢とともに轟B式土器群を出土する遺跡では普遍的に見られるものである。

以上のように，アカホヤ火山灰の直上から出土する轟B式土器群をＡ～Ｄ類に細分し，型式学的変化による縦軸の時期設定を試みた。では，この縦軸の時期設定の妥当性や各分類のタイプが横軸にどのように併行するのか検証してみたい。

轟B式土器の中で，Ａｈ直下の轟式土器の属性と野口・阿多タイプの古段階の属性を把握することによって型式変化の方向性が確固たるものとなる。これを念頭におきながら各類を比較・検討したいと思う。まず，九州全域から出土し，轟B式土器の最も代表的なＡ類の単純深鉢を基準にして考えよう。上述のように，Ａ類は型式学的序列によってA1→A2ａ・A2ｂ→A3ａ・A3ｂという変化が想定できたが，これをそれぞれ第１～第３段階として位置づけよう。この型式変化が正しいのかを検証してみると，Ａ１ではＡｈ直下の轟式土器のＡ類と類似した属性が認められる。いわゆるＡｈ直下の轟式土器Ａ類の隆起帯を貼りつける手法・口縁部中心の文様構成・縦隆起線の存在・貝殻による器面調整といった属性が轟B式Ａ１段階でみられ，ミミズバレ状隆起帯として定着したものと思われる。また，Ａ３では器面調整において前段階よりも貝殻による条痕の程度が弱まるものやミミズバレ状隆起帯に代わってくっきりした隆起帯がみられる。この属性は野口・阿多タイプの古い段階に存在するものである。Ａ２はこの両者の中間的立場にあるので，Ａｈ直下の轟式土器Ａ類→A1～A3→野口・阿多タイプへの変化は妥当なものと考えられる。従って，轟B式のＡ類は縄文早期末のＡｈ直下の轟式土器から関連を持つものであり，九州では在地系のⅠ群土器と見なせる。

Ｂ類は，既にミミズバレ状隆起帯が成立していることからＡ１と同じく第１段階から存続するものと考えられる。長崎県のつぐめのはな遺跡では，Ａｈ直下の轟式土器Ａ類としたものがミミズバレ状隆起帯を主体とする層よりも下層で確認でき，それに縦隆起帯が組み合わされた形で出土しているので，Ａｈ直下の轟式土器からの連続性の一端の可能性が指摘できよう。この類はミミズバレ状隆起帯の衰退や太さの異なる隆起帯が複合される要素もみられるが，細分の基準にするには無理がある。資料の増加を待ちたい。場合によっては，Ｃ類と組み合わさった資料が存在する可能性がある。

Ｃ・Ｄ類は単純深鉢からなるＡ・Ｂ類とは，器形や文様構成において大きな差を見いだせる。C1でみられる屈曲型器形や渦巻状の幾何学状文様は，Ａｈ直下の轟式土器の中にはみられない属性である。但し，大きく見れば縄文早期末の押型文土器や手向山式土器で屈曲型と胴張型の器形がみられるし，Ａｈ直下の轟式土器のＣ類とした中で鹿児島県の片野洞穴の最下層で出土した同心円状の条痕文が確認できる。しかし，これらが轟B式土器群へつながりを持つのかどうかは確証できない。今のところでは突発的に出現したと考えたいが，アカホヤ火山灰の直下からの連続性も考慮しておくべきであろう。Ｃ１は器形や文様において，Ａ・Ｂ類の初期段階と顕著な差があるが，縦隆起帯

を用いることやミミズバレ状隆起帯を持つことなど細部においては組み合わせ的様相を示す部分もある。従って，C1はアカホヤ火山灰直上で初出することとA１・Bと類似の属性が認められることとで第１段階に位置づけられよう。D１もC１の屈曲型器形の変形の延長上にあるものと思われる。C２は渦巻状の文様がなくなるものの複合隆起帯や幅広の横隆起帯に刻み目を施すなどC１からの継続性がみられ，C３はさらに退化が進むことでそれぞれ第２→第３段階と設定できよう。第２段階となるD２もC類とほぼ同一の型式変化を示すが，山陰地方の刺突文が登場することのみが異なる。この刺突文は山陰地方の在地系土器群に多くみられる文様であるが，九州との関連性の問題は山陰地方との比較・検討の際に再度触れたい。

このようにみると，Ⅰ群土器に関しては高橋信武が示してきたように縄文早期末からの継続性をもってアカホヤ火山灰上層の轟３→４→５式土器という変化は妥当なものと考えられる。Ⅱ群土器の場合は，器形と文様がⅠ群土器と顕著な差が認められるが，上述したようにミミズバレ状の縦隆起帯文様が組み合うなどⅠ群土器との関連性が指摘できる。従って，Ⅱ群土器に関しては山陰よりも九州で出現した可能性が強く，Ⅰ群土器と共存するものと考えたい。

3）轟B式土器の九州での編年と地域性

今まで，九州で発見された轟B式土器群の各類の併行性・時期差について述べてきたが，ここでは各段階のまとめと地域性問題について見解を示そう（表１）。九州において第１段階は，縄文前期前半期として画期的な時期にあたる。土器文化もAh直下の轟式土器に比べ，多くの新しい属性が現れる。最も大きな特徴は屈曲型・胴張型器形の出現である。第１段階では単純深鉢（A１類-Ⅰ群土器）と屈曲・胴張型（C１・D１類-Ⅱ群土器）とに大別できる。これは轟式土器の大きな特徴として，すでに小林久雄によって「単純な深鉢形」と「長頸を有し腹部の張った深鉢形」とに分類されたものである。A１の単純深鉢ではAh直下の轟式土器との関連性がみられ，ミミズバレ状隆起帯として定着する。C1でも幾何学的文様にミミズバレ状隆起帯が組み合っている。ところが，Ah直下の轟式土器のB類とした板状施文具による微隆起帯を作り出す技法は轟B式の第１段階ではみられない。この段階の特徴は，ミミズバレ状隆起帯が定着することと新しい屈曲型・胴張型器形と渦巻状を基本とする幾何学状隆起帯が出現することとに整理できよう。分布域はA１が九州全域，Bが主に長崎県の南側から熊本県・鹿児島県にかけて，C１・D１が中九州の海岸地域や五島列島である。

第２段階は，各類において第１段階を受け継いでいる。そして，A２bが北部九州地域で単純深鉢から分化し，砲弾型器形・区画隆起帯が出現する。また，隆起帯が波状化する現象も北部九州の特徴であろう。D２の山陰的要素である刺突文は，主に中九州の轟・曽畑貝塚でみられる。このように，第２段階では，第１段階でみられたミミズバレ状隆起帯の多条のものが縮小すること，北部九州で波状隆起帯がみられること，C・D類において渦巻状隆起帯がなくなることという特徴がみられる。分布域は各類において第１段階とほぼ変わらないが，北部九州でA２bが登場する。

表1　轟B式土器の編年表

Ａｈ直下の轟式土器					
A		B		C	⇨K―Ａｈ層
……					
段階＼群	轟　B　式　土　器				
	Ⅰ　群		Ⅱ　群		
1	A 1	B	C 1	D 1	
2	A 2 a A 2 b		C 2	D 2	
3	A 3 a A 3 b		C 3		
	野口・阿多				

第３段階は，Ａ類にはミミズバレ状に代わってくっきりした隆起帯が施され，Ｃ類は屈曲型器形の角度が緩やかになり，文様も退化気味である。この段階になると退化した屈曲型器形が西北九州の伊木力・柏原遺跡・遠賀川流域まで広がり，東九州では下菅生Ｂ遺跡でも確認できる。この後の野口・阿多タイプ段階になると屈曲型器形は消滅する。これとは対照的に，第２段階に主に北部九州でみられたＡ３ｂの砲弾型器形の伝統は野口・阿多タイプ・曽畑式土器まで受け継がれる。南九州では尖底器形の深鉢がみられるが，この時期の地域的特徴であろう。南九州でこの尖底土器群の後の時期の土器群については究明されていない。南九州で野口・阿多タイプとされる阿多貝塚ではこの尖底深鉢土器が存在しないのでこの属性は第３段階で消滅する可能性がある。

このように，各段階ごとに特徴や各類の分布などを述べてきたが，ここで轟Ｂ式土器群は大きく単純深鉢・砲弾型器形のⅠ群土器と屈曲・胴張型器形のⅡ群土器から成り立ち，各類にそれぞれ分布域が異なることに気づくであろう。縄文早期末から関連をもつ在地性の強いＡ類の単純深鉢は，九州全域に分布し，山口県南岸でも見つかっている。アカホヤ火山灰降灰後に出現するＣ・Ｄ類の屈曲・胴張型は主に中九州沿岸地域や五島列島にみられる。ただ，第３段階になると北部九州や東九州にまで退化した形で出土する。第２段階で出現する砲弾型器形は北部九州，特に西北九州に集中し，Ｃ類との関連性は少ないようである。

ここで野口・阿多タイプに移行を果たすのはＡ類のⅠ群土器である。Ｃ・Ｄ類のⅡ群土器は退化した段階で消滅する。従って，縄文前期の前半期から後半期への移行は在地系のⅠ群土器によるものである。河口貞徳は南九州においてアカホヤ火山灰直下層で出土する轟式土器を轟Ⅰ式とし，これが塞ノ神Ａ式→塞ノ神Ｂ式の後続する型式であることを明らかにしている（河口 1985ａ）。このようにみると，轟Ｂ式のⅠ群土器は縄文早期末以降継続して関連性を有していることが明らかであろう。それでは九州内でのＣ・Ｄ類のⅡ群土器の存在はどのようなものであろうか。この類は轟Ｂ式の第１段階に出現し，第３段階で退化してしまう。在地系Ａ類の分布域を越え，山陰・山陽地方や韓国南岸に影響を与えたものと思われる。出現期の第１段階では中九州の沿岸にあり，五島列島

の堂崎遺跡でもみられることから海との関連性が強いものと考えられる。山陰・山陽地方の瀬戸内沿岸・韓国南岸との交流が島を介しての海路によるものであれば，五島列島は拠点地として重要な意味を持つ。

IV. 縄文前期前半期の山陰と山陽の様相

1) 山陰地方の土器分類と編年

山陰地方においては，轟B式系とされる土器が単独ではなく在地系の土器と共伴する形で出土する。従って，ここでも共伴の土器をともに検討する必要がある。また，この地域では各時期における分層の状況が分かる遺跡が数少ないが，目久美遺跡の縄文前期層で羽島下層Ⅱ式土器より下で轟B式系と在地系土器が出土し，上福万やタテチョウ遺跡では縄文早期から時期的に連続性を持って出土していることが分かった。山陰地方においては，このあり方を目安として土器分類が可能となり，これに型式学的細分を加えるのが最も良い方法と考える。

縄文前期の前半期における山陰地方の土器の特徴は器形と文様から大きく四つに分けられ，それぞれ細分が可能である。

山陰A類：肥厚口縁を持つ土器。

A1（図 13. 1～11）は，条痕文のみが施されたものであり，当該期の山陰地方のほぼ全遺跡でみられる在地性土器である。器形は単純深鉢と緩いカーブを持つものがある。文様は条痕文のみであり，そのナデの方向は一定ではない。また，口縁部の肥厚の幅が広いタイプが相当数みられる。

A2（図 13.12～19）は，口縁部の肥厚帯に刺突文や押引文，貝殻文が施されるものである。器形はA1と似るが，器面調整の条痕においてはやや衰退ぎみである。

A3a（図 14.20～29）は，刺突文や押引文が口縁以下に広がるものである。条痕はA2よりさらに衰退し，条痕の施されないものやわずかに痕跡を残すものが主体となる。また，A1とA2でみられた肥厚口縁のうち，肥厚の幅が広いタイプが見られなくなり，波状口縁が加わる。文様構成は主に刺突文と押引文からなるが，口縁部と胴部に区画を設け，文様を入れる区画文様帯のものが主体をなす。A3b（図 14.30～36）は，A3aと同様であるが口縁部に肥厚を持たないものである。区画文様帯と口縁部から多条の文様を施すものとがほぼ均等に存在する。

このA類の変化をみると，条痕においてA1では土器の器面に強い条痕文を施すが，A2→A3に移行するにつれ衰退する。文様においては，刺突文・押引文が出現→口縁部のみの文様が胴部にまで拡散→区画文様帯が成立という変化がみられる。このように山陰地方では，条痕文の影響が徐々になくなり，羽島下層Ⅱ式土器の文様的要素に移り変わるものと考えられる。このA類土器群の分布は，山陰全域と山陽の内陸部にかけて見られ，その分布範囲は比較的狭く，他の地域ではあまりみられない。

山陰B類：口縁部の下に一条の隆起帯を貼りつけるもので山陽在地系の土器。

B1は山陽地方において口縁端部の下に一条の隆起帯を貼りつけたものであり，条痕文以外の文

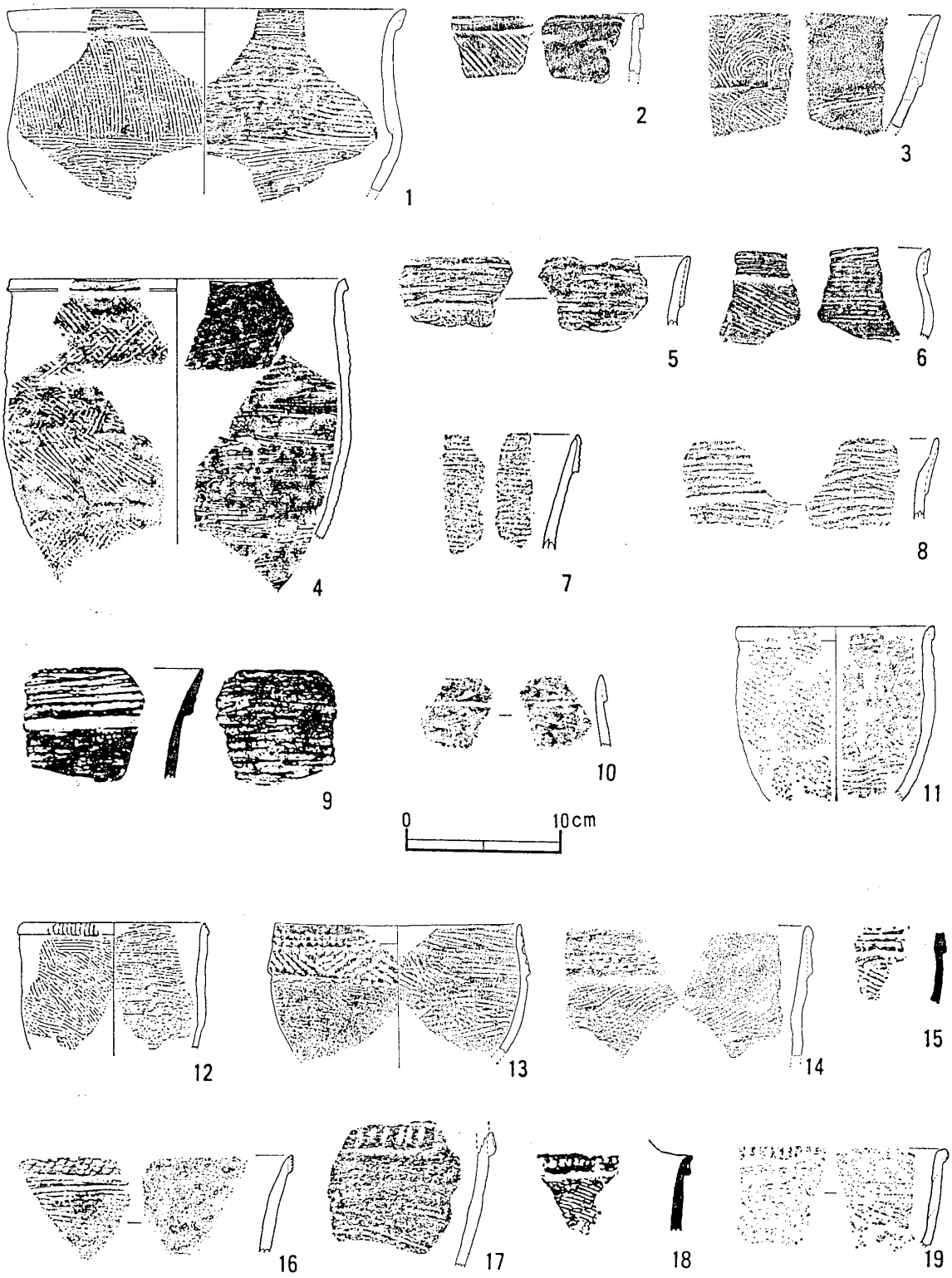


図13　山陰A１・A２類　　西川津１～３・12～14，上福万４，目久美５・16，タテチョウ６・17，陰田７，竹ノ花８，後谷９・18，下山南通10・11，久根ケ曽根15，長山馬籠19

様を持たないが，山陰地方ではこの類が発見されていない。

B２（図 15.37～43）は，口縁部に一条の隆起帯をはりつけ，その上下に刺突や押引文を施すもので山陽地方からの影響によるものである。数の少ない土器群であって全体の様相を把握しにくいが，山陽地方の同じタイプからみれば，単純深鉢からなり，文様構成は口縁部に集中するようである。

B３（図 15.44）は，B２よりも隆起帯の下に文様が広がるもので区画文様帯が施されている。山陽在地の口縁部と山陰在地の区画文様帯が組み合わされたものである。

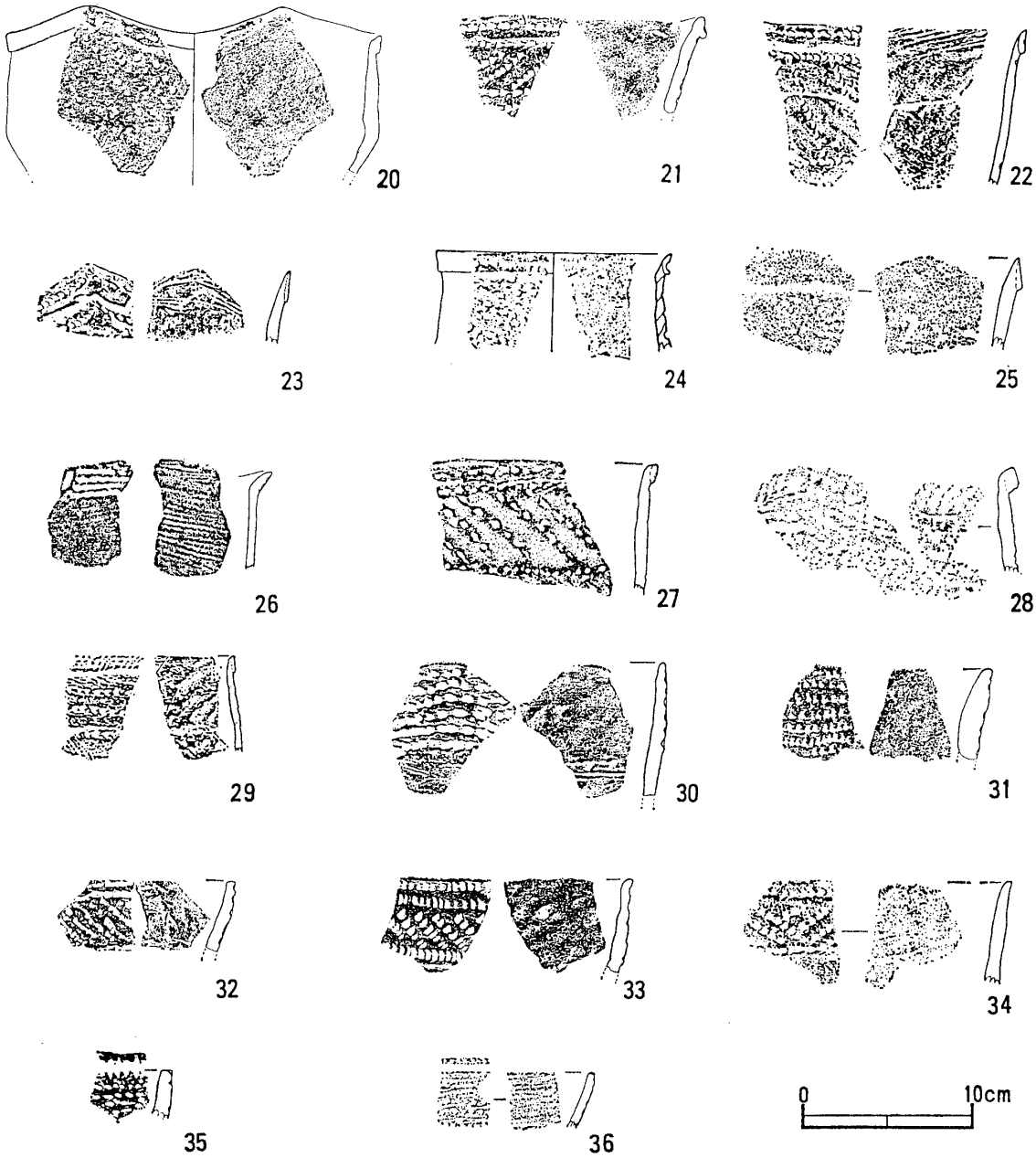


図14　山陰A３ａ・A３ｂ類　　西川津20・21・30～34，目久美22・23，陰田24，竹ノ花25・36，タテチョウ26・27，下山南通28・29・35

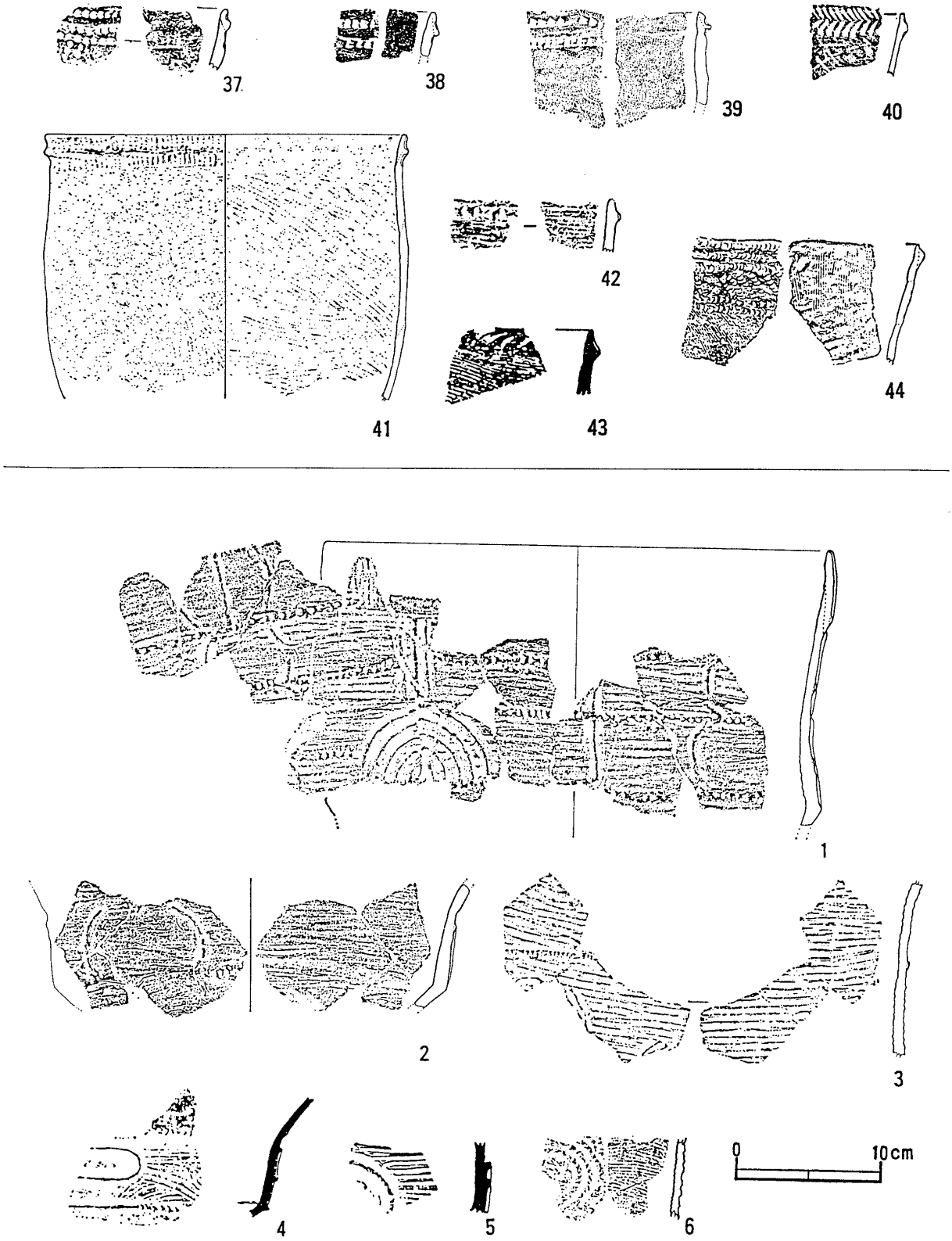


図15　山陰B2・B3・C1類　　目久美37，西川津38・39・44・1・2，タテチョウ40，長山馬籠41・3，下山南通42，後谷43・4・5，陰田6

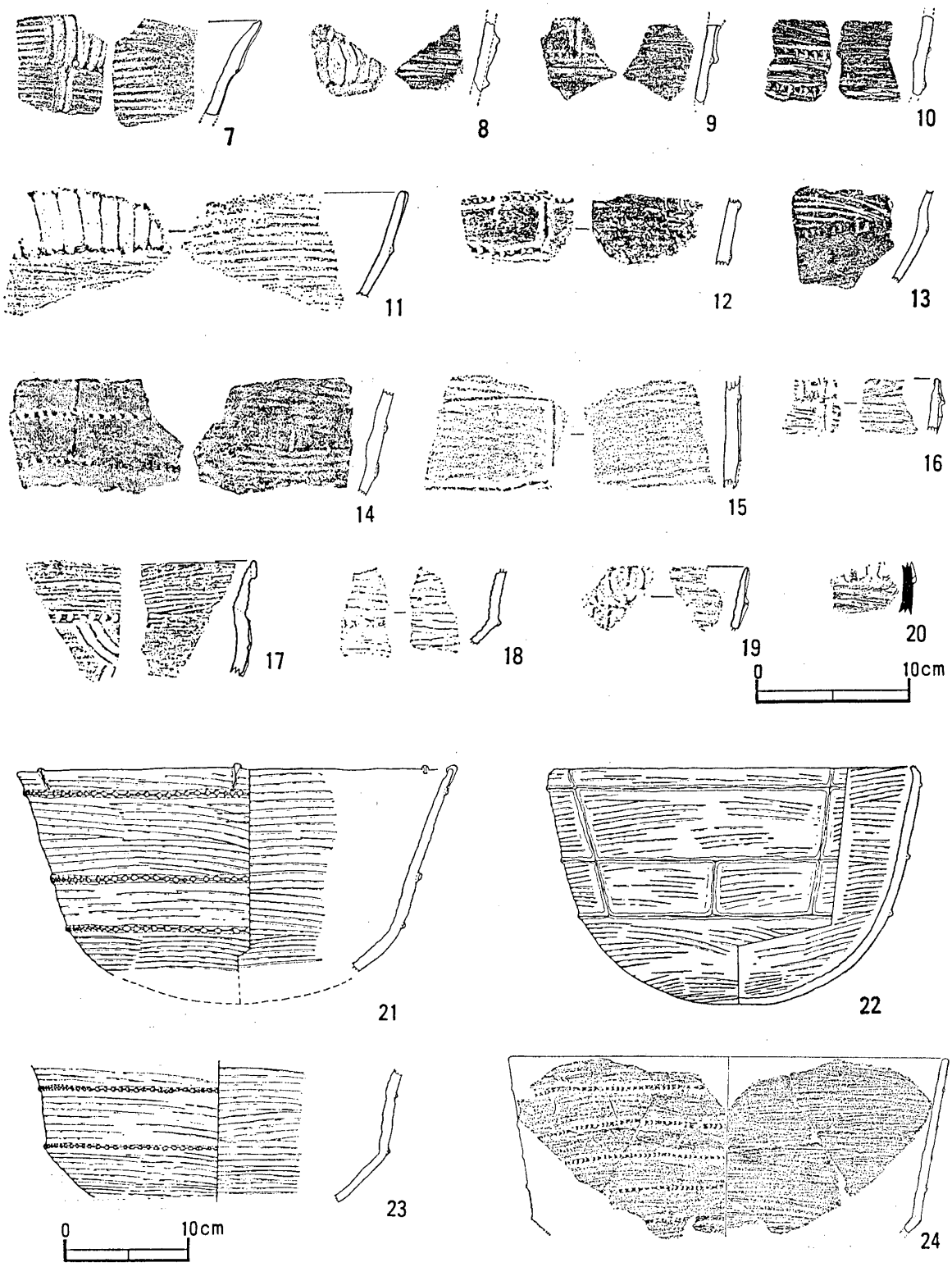


図16　山陰C２類　　西川津７～10・24，目久美11・12・21～23，タテチョウ13・14，竹ノ花15・16，陰田17，長山馬籠18・19，宮尾20

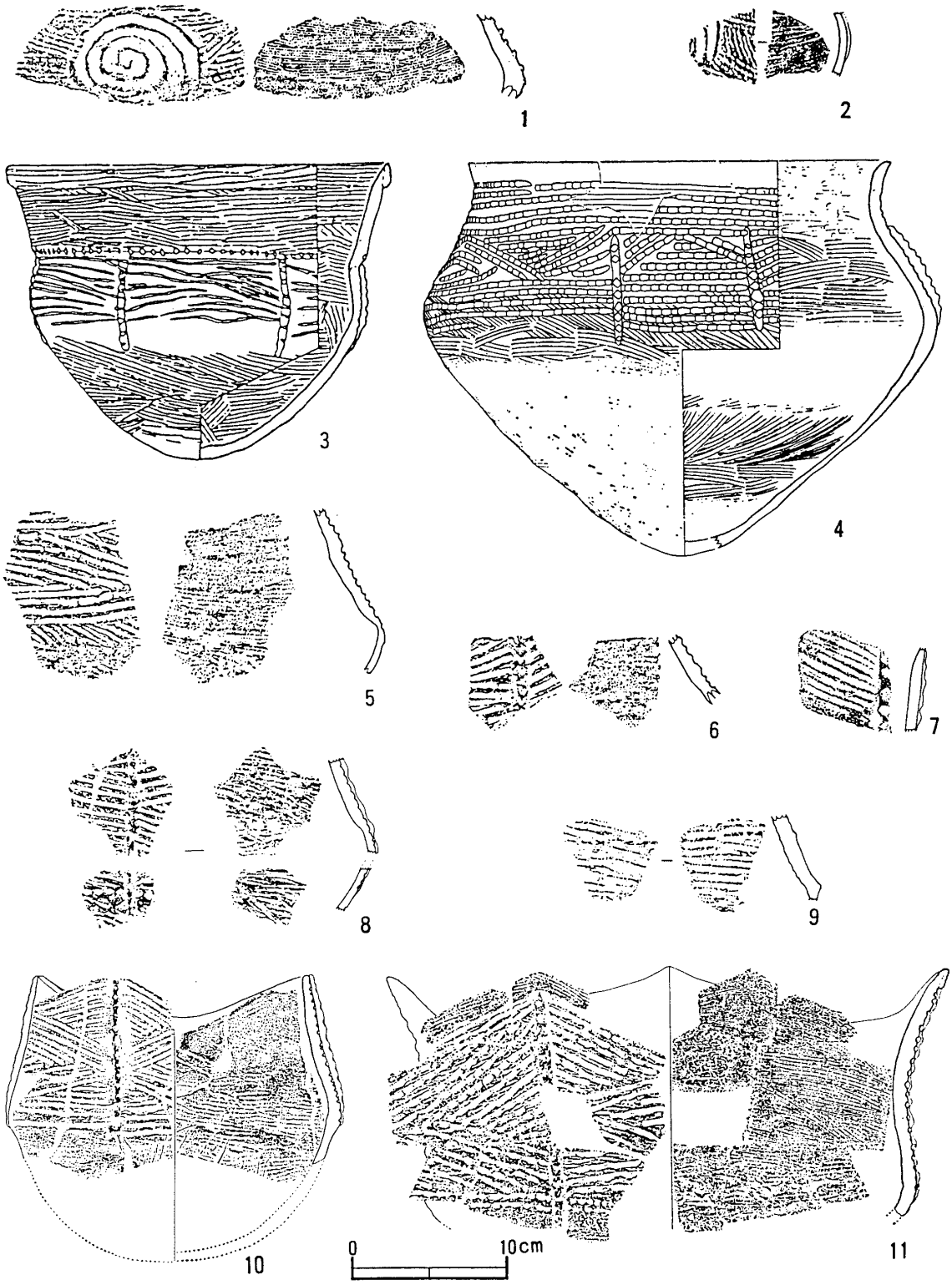


図17　山陰D1・D2・D3類　　陰田1・4～6，上福万2，志高3，タテチョウ7，下山南通8・9，西川津10・11

山陰C類：屈曲型器形や縦隆起帯を持つもの。

C1（図 15.1～6）は，渦巻状を伴う幾何学状の隆起帯を巡らすもので，器面調整に条痕が施される。器形は屈曲型であり，九州の轟B式C1と同一系統のものであろう。土器片の数は少なく，分布範囲は山陰地方に限られる。

C2（図16）は，横隆起帯文・縦隆起帯文・複合隆起帯文からなるものである。横隆起帯上に刻み目を入れるものが目立つ。器形は屈曲の程度が弱くなり，隆起帯の文様構成が比較的多様である。縦隆起帯を主とするものは，轟B式のB類のように分離しないでC類に含めたが，これに関しては再度触れたい。

このC類は，器面調整においてA類のように条痕の衰退・省略といった変化があまりない。口縁部に肥厚を持たないのが原則であるが，数は少ないもののA類の肥厚口縁と折衷のものがC2でみられる（図 16.17)。C1→C2への型式変化は，屈曲器形の程度の強→弱と幾何学状隆起文→縦・横・複合隆起文とで想定できよう。こういった状況は，九州と同様であり，関連性が最も強い土器群である。

山陰D類：主に胴張型器形で，縦隆起帯の両わきに文様を施すもの。

D1（図 17.1）は，器面調整に条痕が施され，器形は胴張型をなすものであり，渦巻状隆起帯を主とする幾何学状文様が施される。図示のものは小片ではあるが，九州の轟B式D1と近似性を示すものである。

D2（図 17.2～4）は，胴張の部位に縦隆帯と刺突文・押引文が組み合わされたものである。胴張型器形は屈曲型器形の変化として考えられるもので，これが山陰独自のものへと発展するのである。文様構成は，胴張の部分に縦隆起をはりつけ，この隆帯の両わきに複合の刺突文や押引文を施すものである。

D3（図 17.5～11）は，D2と近似するが，縦隆帯を口縁部から貼りつけるものである。縦隆帯の両わきに施す文様は，山陽独特のものである。この文様の施文や波状口縁・横隆起帯などは，A3・C2類との関連性を示す。D類の分布範囲は，山陰地方と山陽内陸部にまで広がり，瀬戸内沿岸の羽島貝塚にも存在が確認される。

以上のように，縄文前期の前半期において，土器の細分と型式変化による時期設定を試みた。次に，この時期設定の妥当性や分類したA～D類タイプの併行性について考えてみよう。

研究史でも述べたように，当該期における山陰地方では，近隣の山陽地方をはじめ近畿や九州地方との交流が活発に行われ，土器の様相も複雑なものとなる。この複雑な様相を統合して出現するのが羽島下層Ⅱ式土器群である。宮本一夫も指摘するように，山陰地方の当該期の遺跡のうち，縄文早期後葉の菱根式から当該期までの土器の連続性を有する遺跡群と当該期から羽島下層Ⅱ式土器群を出土する遺跡群とでは，複雑な様相の時期の中でも時期差があるものと判断する。すなわち，縄文前期前半期において前者は後者よりも古い可能性を示すことになる。従って，前者の土器群を出土する西川津・タテチョウ・後谷・上福万・下山南通遺跡と後者の土器群を出土する目久美・タ

テチョウ・竹の花遺跡などとを比較・検討することによって時期差がより確固たるものになると考えている。

各遺跡ごとに比較してみると，羽島下層Ⅱ式土器群を出土する遺跡では，C１とD１が見られない。このことから，C１とD１は当該期において羽島下層式土器群より古い可能性を持つものと考えられる。山陰在地系の土器として認識したA類はほぼ全遺跡で見られるが，上述のように型式学的変化によってA１→A２→A３という序列を想定した。これをそれぞれ第１→第２→第３段階とするならば，古い可能性を持つC１・D１は第１段階に属する。A3aとA3bは肥厚口縁の有無による差はあるが，刺突文や押引文による施文，それに区画文様帯の成立といった共通の属性を持つことから同時期のものと見なせる。C２は山陰の多くの遺跡に広がる拡散の時期であることと，器形の屈曲が弱くなっていくこととによってC１より後の段階に，D２以降は山陰のみの独自の文様に発展することからD１より後の段階に属するものと考えられる。

B類は，山陽の在地系の影響によるものであり，山陰では目久美・西川津・タテチョウ遺跡で出土する。このうち，目久美とタテチョウ遺跡では羽島下層Ⅱ式土器群が共伴するので，当該期において比較的新しい時期に属する。従って，山陽との交流が活発になるのはC１より後の時期になるものと考えられる。これは，後に説明するが，型式学上A１と同時期と思われる山陽のB１が山陰では発見されていない点から，A１より新しい第２段階とすることができる。B２→B３への変化は，文様の口縁部中心→文様の胴部近くまで広がるという変化およびB３にみられる波状口縁の出現と区画文様帯の成立とによって，時期差が想定できる。この流れは，A２→A３においても同様なので，B２→B３はそれぞれ第２→第３段階に位置づけられるものと考えられる。

山陰地方では，当該期の全遺跡から山陰在地系のA類がみられるが，A類以外の土器群はそうではない。これはA類以外の土器群が山陰地方では在地性の弱いものであることを意味するが，その根拠はB類が山陽との交流によるものであり，C・D類が九州の轟B式との交流によるものであるということで説明できよう。また，C類が口縁の形や器形・文様などにおいてA類とさほど交じらないことでも証明できよう。ただ，D類はC類の変形したものであって，山陰独自の土器へと発展するので第２段階以降の時期には在地化したものとして理解したい。

2) 山陽地方の土器分類と編年

当該期の山陽地方ににおいては遺跡と出土資料が少ないのが現状である。山陽地方の土器分類は内陸部の帝釈峡遺跡群と瀬戸内沿岸の羽島貝塚のものが良好な資料である。山陰地方との近隣地域である山陽の内陸部では，縄文前期の土器を出土する帝釈峡遺跡群がおよそ10km以内の範囲で分布する。帝釈観音堂・帝釈馬渡岩陰・戸宇牛川岩陰遺跡からなるこの遺跡群では，数は少ないものの山陰地方でみられたA～D類の土器が存在する。瀬戸内沿岸の羽島貝塚でも数少ないもののB～D類が出土する。従って，先述の山陰地方の型式分類は，この地域においても適用できるものと判断し，以下それに準じて記述していきたい。

山陽A類：肥厚口縁を持つ山陰在地系の影響によるもの。

A1～A3a（図 18.1～7）は，山陰のA1～A3a土器群の諸属性と型式変化がほぼ同様であり，詳しくは山陰で述べた通りである。山陰からの影響による数少ない資料であるが，A2の第2段階で波状口縁が見られるのと山陰ではよく目にする肥厚口縁の幅の広いタイプがこの山陽では出土しない点で異なる。A3b（図 18.16～19）は，隆起帯を貼りつけることはなく，山陰のA3bに通じる面がある。器面調整において，条痕が衰退・省略化されるものが多い。器形は主に単純深鉢を呈

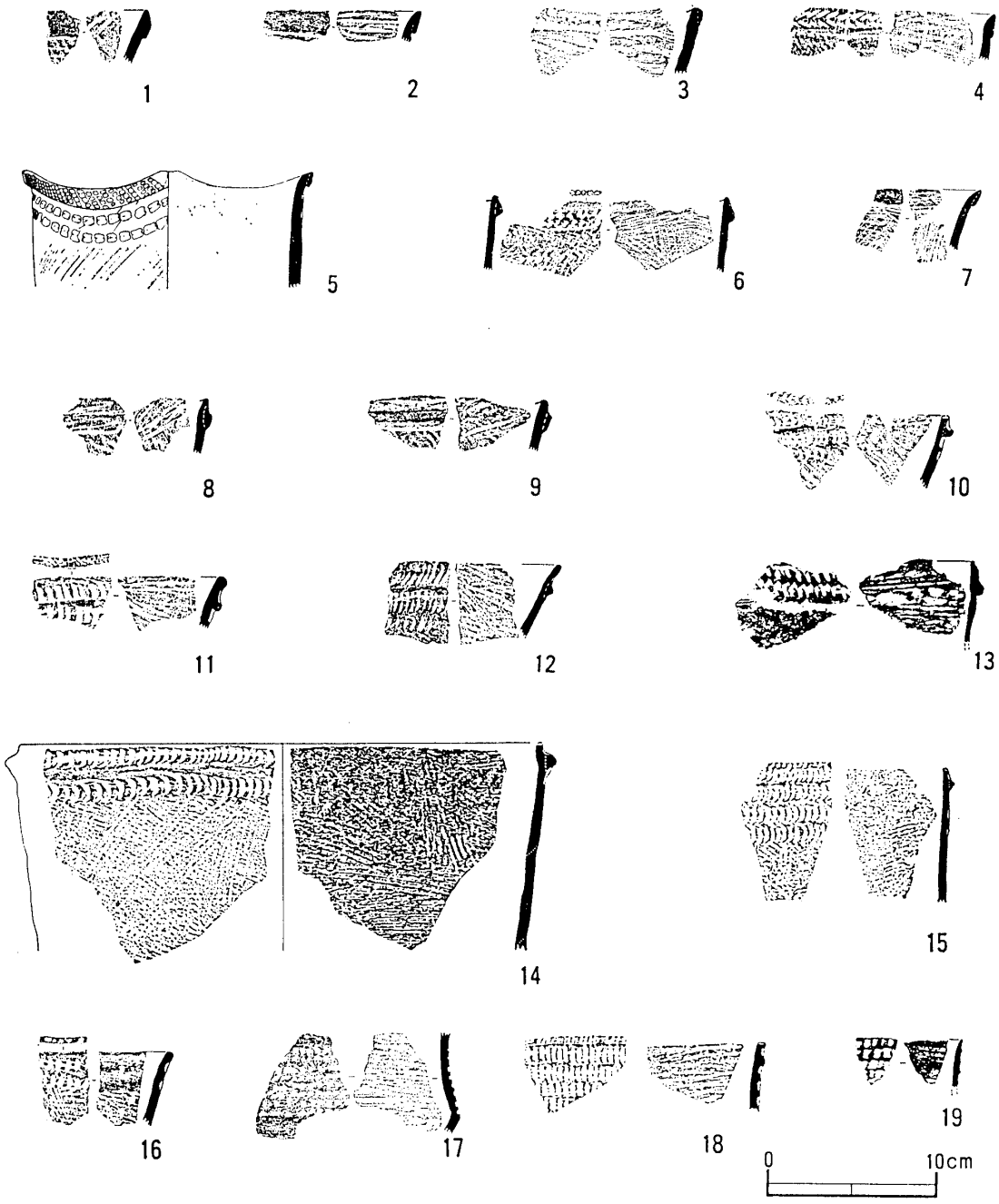


図18　山陽A1・A2・A3a・A3b・B1・B2類　帝釈観音堂 1・6・8・9・11・12・16，帝釈馬渡2～4・7・17，戸宇牛川5・10，羽島13・18，大浦浜14・15・19

するが，胴張型の器形も加わる。文様は刺突文や押引文からなり，山陰のＡ３でみられた区画文様帯を施すものは存在しない。しかし，刺突文の形態が多様であり，羽島下層Ⅱ式の様相に近似している。出土は瀬戸内沿岸でも多い。

山陽Ｂ類：口縁部に一条の隆起帯を貼りつける山陽在地系のもの。

B1（図 18.8,9）は，器面に条痕文が施されるものであり，山陽の山間部である帝釈峡遺跡群でみられる数少ない資料である。文様は横方向ないし斜方向にナデを施す。巡らした一条の隆起帯の断面は幅広の台形を呈する。この類は瀬戸内沿岸ではまだ発見されていない。B2（図 18.10～15）は，器面に条痕文が施され，器形は単純深鉢である。一条の隆起帯の断面は三角状であり，その上下に刺突文を横方向に順序よく施す。刺突文様は口縁部に集中しており，その文様が山陰のA3ａのように胴部にまで広がるものは見あたらない。このＢ１～Ｂ２への変化は，条痕の衰退化，隆起断

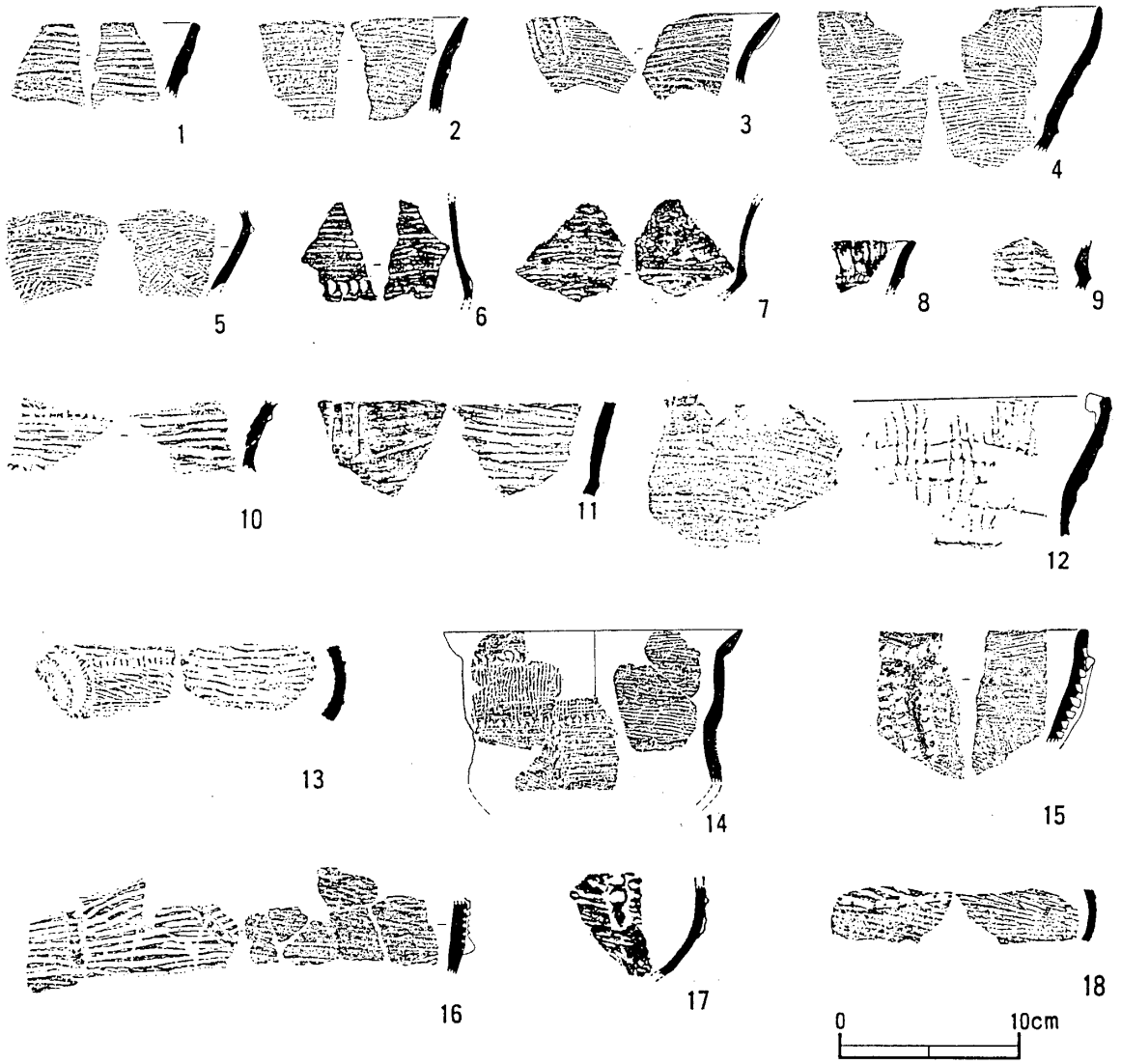


図19　山陽C2・D1・D2・D3類　　帝釈観音堂１～４・14・15，帝釈馬渡５，羽島６～８・17，江口９・10，大見11・13・18，島地12，戸宇牛川16

面の台形状→三角状であり，時期差が認められる。

山陽C類：屈曲型器形に横・縦・複合隆起帯を貼りつけるもの。

C1は山陰において幾何学状の隆起帯を貼りつけるもので，山陽では未発見である。C2（図 19.1〜12）は，器形が緩い屈曲を持つものが多い。しかし，胴部までを残す土器片が少ないので断言できないが，帝釈峡遺跡群を検討する限りでは，緩い屈曲のカーブがなくなり，ほぼ外開き状の器形になるものが存在する可能性がある。これは山陰でも同じである。このC類は山陰に比べると出土量は少ない。山陽では主に帝釈峡遺跡群で出土するが，瀬戸内沿岸の羽島・江口・島地貝塚・大見遺跡などでも確認できる。時期的には，C１が存在しないことから山陰と同じように第２段階以降に属するものであろう。

山陽D類：胴張型器形で縦隆帯の両わきに文様を施すもの。

D1（図 19.13）は，渦巻状隆起帯を基本とする胴張型器形である。隆起帯上にはキザミ目を施す。瀬戸内沿岸の大見遺跡で出土したものである。

D2（図 19.14）は，口縁部と胴部に複合の隆起を貼りつけ，その隆帯の両わきに縦・横の沈線を施すものである。しかし，諸属性においては山陰的要素を色濃く残す。その山陰的要素を口縁部からみると，山陰の特徴の肥厚口縁が認められ，器形においては屈曲型と胴張型とが複合した形である。また，隆起帯の文様は山陰のD２に類似する。これは山陽の要素に山陰のA・D２類が折衷したタイプであろう。

D3（図 19.15〜18）は，口縁部より縦隆起帯を貼りつけ，それを基底にして両わきに多条の刺突文や沈線文様を施すものである。分布は山陽内陸部より瀬戸内沿岸の羽島貝塚・大見遺跡までみられる。

以上のように，山陽地方においてA〜D類に分類したが，これらの併行関係や時期差を考えてみたい。A〜D類の土器群は帝釈峡遺跡群の層位差によって繊維土器と羽島下層Ⅱ式との間に存在するものとされる。山陰地方のタテチョウ遺跡でも縄文早期末に位置づけられる菱根式から羽島下層Ⅱ式土器まで連続性がみられるので，A〜D類は縄文前期の前半期に位置づけられる。この縄文前期前半期の中での時期差は山陰の各段階に対比され，山陰で示した土器型式の細分と編年が山陽地方でも当てはまるものと考えられる。いくつか違いを補足すると，山陽のB１が山陰ではみられないし，山陰のC１が山陽では発見されていない。これは瀬戸内沿岸でD１が存在することからC１も今後出土する可能性がある。また，第２段階で山陽より受け入れた山陰のB２は，一条の隆起帯を巡らす属性が第３段階にまで継承されるが，山陽では第２段階で消滅することになる。

3）山陰と山陽地方の関連性について

山陰と山陽地方において分類と時間設定を行ったところで，この両地域の特徴や関連性について述べることにする（表２）。第１段階は，在地系である山陰A1・山陽B１のⅠ群土器からなる。これに九州地方との交流によって，C1・D1のⅡ群土器が山陰地方に根付くのである。同様の在地系

土器でありながらも山陰A１は山陽の山間部の帝釈峡遺跡群まで分布域を広げるが，山陽B１は山陰地方での発見をみない。この段階では，両地域のⅠ群土器の成立，山陰の在地系土器の東進，C・D類のⅡ群土器出現といった特徴があげられよう。

第２段階は，両地域とも活発に交流が行われる時期である。A2とB2のⅠ群土器には口縁部を中心として刺突文や押引文が施され，その文様の幅が口縁部に限られる。第１段階では山陰でみられなかった山陽在地系のB類が山陰でもみられるようになり，山陰に分布を持ったC1がC2に継承した形で分布範囲を広げる。D２では胴張型器形に縦隆起と押引文が組み合わされた山陰独自の文様に変化する。山陽でのD2は交流の活発化に伴い，口縁においては山陰のA1，器形はC類，文様はD２というように山陰の属性との折衷タイプのものである。この段階においては，Ⅰ群土器において器面に施される条痕が第１段階より衰退，刺突文・押引文などの出現，C類の定着，山陰独自のものとしてD１からD類の継承，山陰の山間部への東進，山陽から山陰へのB２の流入といった特徴がみられ，交流の活発さを物語る。

第３段階は，Ⅰ群土器に刺突文や押引文が主文様として加わるが，山陰と山陽とで様相がやや異なる。山陰在地系のA３は，肥厚口縁が守られるA3ａと肥厚口縁の存在しないA3ｂがうまく共存しているが，山陽では口縁端部の下部に一条の隆起帯を巡らすB2を継承したタイプがなくA3ｂのみ存在する。このA3ｂにおいても，刺突文・押引文などで区画文様帯を持つものと横に何条かの文様を施すものとがあるが，前者の区画文様帯は山陰地方で主にみられる。山陰でのB3は，B2の伝統が３段階にまで受け継がれ，山陰特有の区画文様帯と組み合わされるものである。両地域のⅠ群土器は，B類よりもA類の方がもっと根強いものである。D類は，山陰独自のものに発展するものであって第３段階に受け継がれ，横隆起を巡らすものや隆起帯がなくなるものなどが出現して多様化する。しかし，D類の基本パターンである胴張型器形は守られるものと考える。この段階は，刺突文系の文様の多様化と拡散，C類の弱化という特徴がみられる。また，条痕文の影響が徐々になくなり，羽島下層Ⅱ式土器群の文様的要素に移り変わる段階である。

このようにみると，Ⅰ群土器とⅡ群土器とでは異なる属性が多く，同一系統としては認められない。山口信義は中・四国地方では胴張型器形が羽島下層（古）式の在地系土器と，底すぼまり型が羽島下層（新）式とそれぞれ共伴するという状況から張胴型から底すぼまり型への変化を考えた。

表２　山陰・山陽の土器編年表

段階＼群	山陰				山陽			
	Ⅰ群		Ⅱ群		Ⅰ群		Ⅱ群	
1	A１		C１	D１	A１	B１		D１
2	A２	B２	C２	D２	A２	B２	C２	D２
3	A３a A３b	B３		D３	A３a A３b			D３
	羽島下層Ⅱ式				羽島下層Ⅱ式			

これに関しては層位の状況からの反論もあり，また本稿の分類からみても両器形の一系統説は成立しにくいものと思われる。

縄文前期前半期に属するこれら土器群は，かつて鎌木義昌が型式名を設定したように羽島下層Ⅱ式の前の段階として羽島下層Ⅰ式と呼ぶのが最も妥当と思われる。

このように，各段階ごとに両地域の関連性について述べてきたが，山陰で中心を持つA・C・D類は，山陽で出土が数少ないものであり，その反面，山陽のB類が山陰では少ない。また，A～D類のうち，羽島下層Ⅱ式につながるものとしては，羽島下層Ⅱ式土器群の諸属性を備えたA３ａとA３ｂがあげられる。刺突文・押引文などの文様を持たないC類や第２段階で消滅するB類は，羽島下層Ⅱ式へ移行する条件から外されよう。すなわち，在地系のⅠ群土器によって羽島下層Ⅱ式への移行が果たされたのである。それでは在地の基盤の弱いC類のⅡ群土器の存在はどのようなものであろうか。このC類は，アカホヤ火山灰降下後に九州地方でみられた縄文前期前半期の轟B式C類との交流によるものである。山陰において在地系のA１と共伴するが，諸属性が当該期の第３段階に至るまで，このA類に混じることは少ない。むしろC類の変形と思われるD類がA３に折衷しており，A類との関連がみられる。分布範囲からみても，A類は山陽の帝釈峡遺跡群が東限であるが，C類は山陽の山間部はもちろん，瀬戸内沿岸や島嶼地方にも存在するものである。このように，A類のⅠ群土器とC類のⅡ群土器とでは，土器の諸属性や分布差において大きく違いが生じている。

Ⅴ．韓国南岸における隆起文土器の様相

1）隆起文土器の分類

韓国南部における隆起文土器の出土は沿岸や島嶼地方に多い。隆起文土器を出土する遺跡の内，層位的発掘がなされている遺跡としては，東三洞・上老大島・突山松島貝塚などがあげられる。これら遺跡で出土した遺物は，新石器時代前期から後期ぐらいまでの時期を示し，韓国南岸の新石器時代全般を理解するには重要な遺跡である。その上この三つの遺跡は，南岸の東側と西側の土器のあり方など空間的相違も把握できるものと思われる。ここで，この三つの遺跡の層位的状況を説明しよう。

東三洞貝塚の層位的発掘は，L. Sample と韓国中央博物館によって行われた。1964年 L. Sample は試掘を行い，AとBトレンチを組み合わせて朝島期→牧島期→釜山期→頭島期→影島期の五層に分けている。Aトレンチは下層から釜山期→釜山・頭島期→頭島期→影島期，Bトレンチは朝島期→牧島期→頭島期→頭島・影島期の順に堆積するという。ここで隆起文土器から瀛仙洞式への移行を示す層は，Aトレンチでは釜山期，Bトレンチでは朝島期→牧島期にあたるが，この部分に曖昧さが存在する。L. Sample はAトレンチの釜山期をBトレンチの牧島期の後に位置づけている。その根拠としてC^{14}年代やレベルなどの問題をあげている。しかし，L. Sample のいう釜山期には，Bトレンチの朝島期に分類すべき土器が数多く存在し，残りが瀛仙洞式以降の様相を示す。この釜山期の場合，さらに分層が可能ではなかったのかという疑問が残るところである。1969～71年にか

けて中央博物館の全面的発掘による報告は未だに発表されておらず，発掘を担当した金元龍・韓炳三とこれを整理した坂田邦洋との間には若干の見解の相違が存在する。

上老大島貝塚は延世大学と東亜大学が共同で発掘を行い，延世大が1・4地区，東亜大が2・3地区を担当した。1地区はⅠ～Ⅹ層，2地区がⅠ～Ⅶ層，3地区がⅠ～Ⅴ層をそれぞれ示しており，地区別に分層の違いはあるが，全体的に文化層は四つに分けられる。出土する土器も隆起文土器→刺突文・押引文→二重口縁土器の順であって無理なく前期から後期まで追えるものと判断する。

突山松島貝塚はⅠ～Ⅴ層を示し，さらに第2次の発掘を通じてⅡ層はa・b，Ⅲ層はa・b・cと分層を加えた。この内，遺物包含層はⅠ～Ⅳ層であり，内容はⅣ層から上層に行くほど隆起文・変形隆起文→沈線・細沈線文→二重口縁土器のあり方を示している。

まず，新石器時代における隆起文土器の位置づけであるが，隆起文土器は現在のところ韓国では最古の土器群である。刺突・押引・沈線文からなる瀛仙洞式の直前まで続く土器群であり，研究者によっては隆起文土器を新石器時代の早期にまで遡らせる見解もある。その賛否はともかく，隆起文土器は新石器時代前期の前半期には既に韓国南岸に広がっていた土器群である。縄文早期末から前期の前半期にあたる時期に属するものと考えられる。

今まで韓国の隆起文土器の研究は，キザミ目を持つ隆起帯と隆起帯に比べ幅の狭い隆起線文とに大別して行われてきた。隆起文土器は，この隆起帯から隆起線文へと変化するものか，それともその逆の順が示されるかが大きな論点の一つであった。従って，ここでも先学の論点に立ち考えていきたいと思う。韓国南岸の隆起文土器は大きく四つに分けられ，細分が可能なものである。

隆起文A類：隆起帯の上にキザミ目を施すもの。

A1a（図 20.1～9）は，平底の深鉢を呈するものであり，この中には小平底も含まれる。口縁の形は外開きが多く，隆起帯を貼りつけた後には粘土帯上に角棒や丸状でキザミ目を施す。この際に隆起帯断面は方形・円形が主となる。施文部位は，ほとんどが口縁部の中程から胴部の方に幅のある隆起帯を横方向に巡らすものである。従って，隆起帯の本数は少ない。A1b（図 20.10～13）は，A1aと似るが，1列の隆起帯にキザミ目を施すものである。隆帯断面は三角形のものが多く，韓国南岸の西側で主にみられるが数は少ない。

A2a（図 21.14～23）は，器形において深鉢を呈し，注口土器も加わる。口縁の形や隆起帯の貼りつけ・断面などはA1と同一である。隆起帯の真上や境目にキザミ目を施すのは接着を強くする役割を果たす。実際に粘土帯を刻んだものはほとんど剥がれることがないが，突山松島貝塚のようにキザミ目を施さない部分が剥がれるものもみられる（図 21.32）。これは九州側のように貝殻によって器面調整を行うため接着を強くするのとは対照的である。施文部位は口縁部の中程から胴部にかけて複合隆起帯を施すのが原則であり，施文順序は横隆起帯が先である。従って，この複合隆起帯は横隆起帯が完全に定着した後，それを基本にして斜方向・山形の隆帯が複雑さを増していく。横隆起帯がなく，斜方向・山形隆起帯のみを施すのもこの類に属そう。A2b（図 21.24～33）は，A2aと似るが，キザミ目を施した隆起帯に隆起線を組み合わせたものである。施文部位は口縁部

の中程から胴部までであり，この際の施文順序は横方向の隆起帯から複合の隆起線の順となる。やはり，横方向の隆起帯の伝統はＡ１から終始持続されるのである。

A3（図22.34～40）は，キザミ目を施した隆起帯に沈線文類が組み合わされるものである。やはり，横隆起帯を基本として沈線文を施すものであり，加わる沈線は斜・縦方向・斜格子文など多様である。

このＡ類は文様構成以外には型式変化を示す要素は少ない。すなわち，Ａ１の器形・口縁の形・

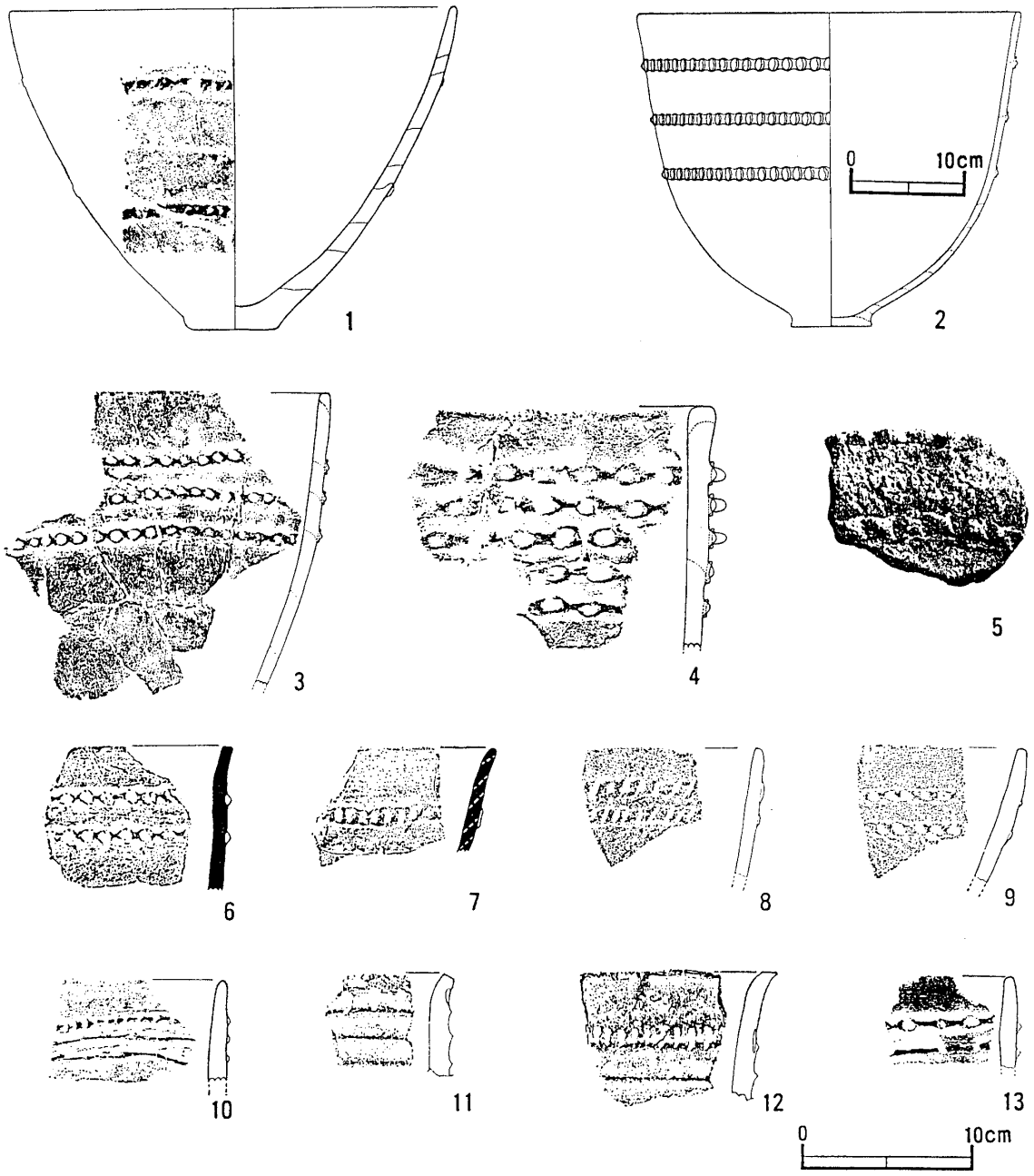


図20　隆起文土器A1a・A1b類　　新岩里１・10，越高２～４，東三洞５～７，欲知島８・９，上老大島11・12，突山松島13　　５・11・12は縮尺不同

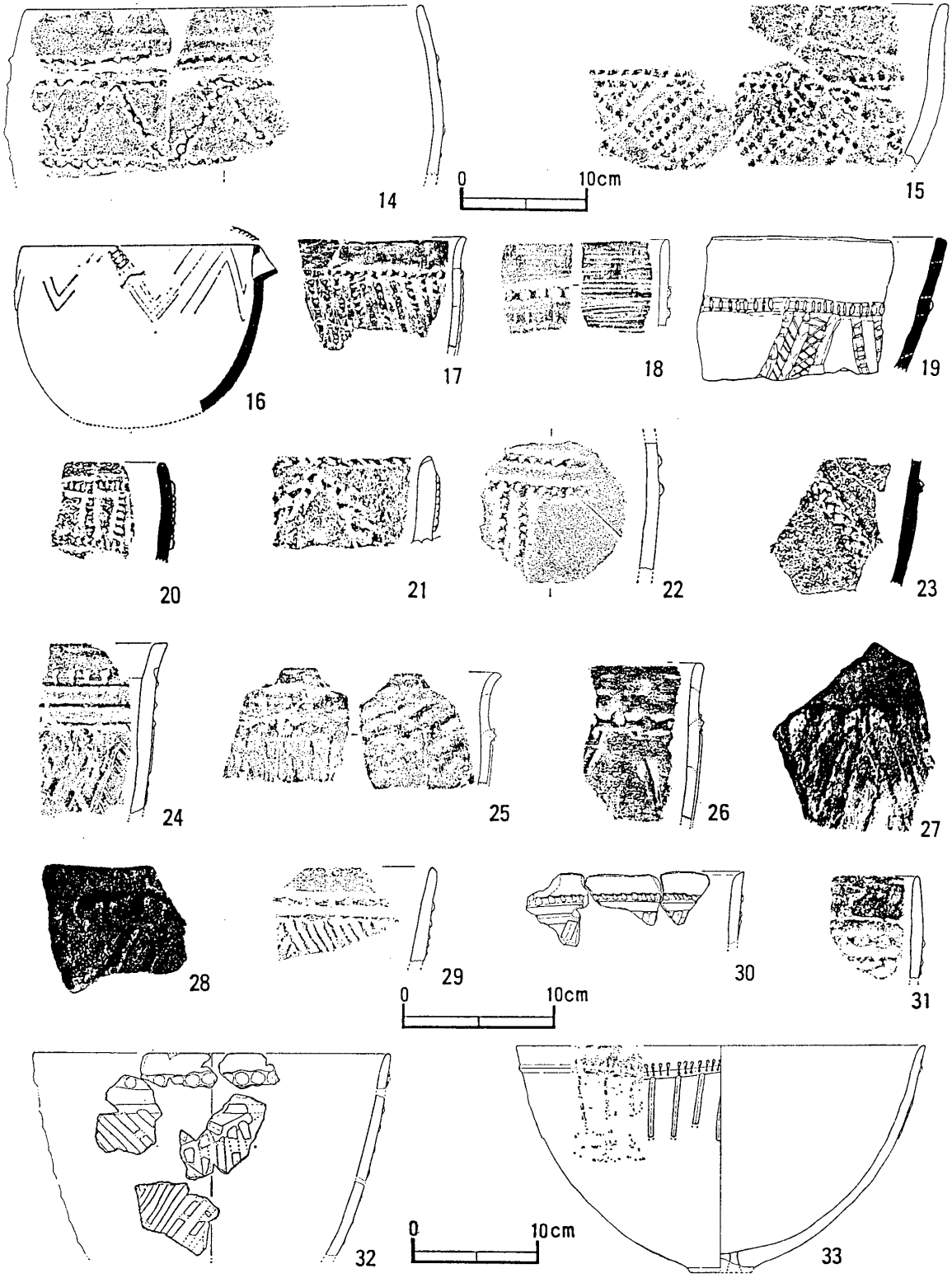


図21　隆起文A2a・A2b類　　新岩里14・15・24，瀛仙洞16，越高17・26，越高尾崎18・25，東三洞19・20・27・28，上老大島21，欲知島22・29，山達島23，突山松島30～33　　21・27・28は縮尺不同

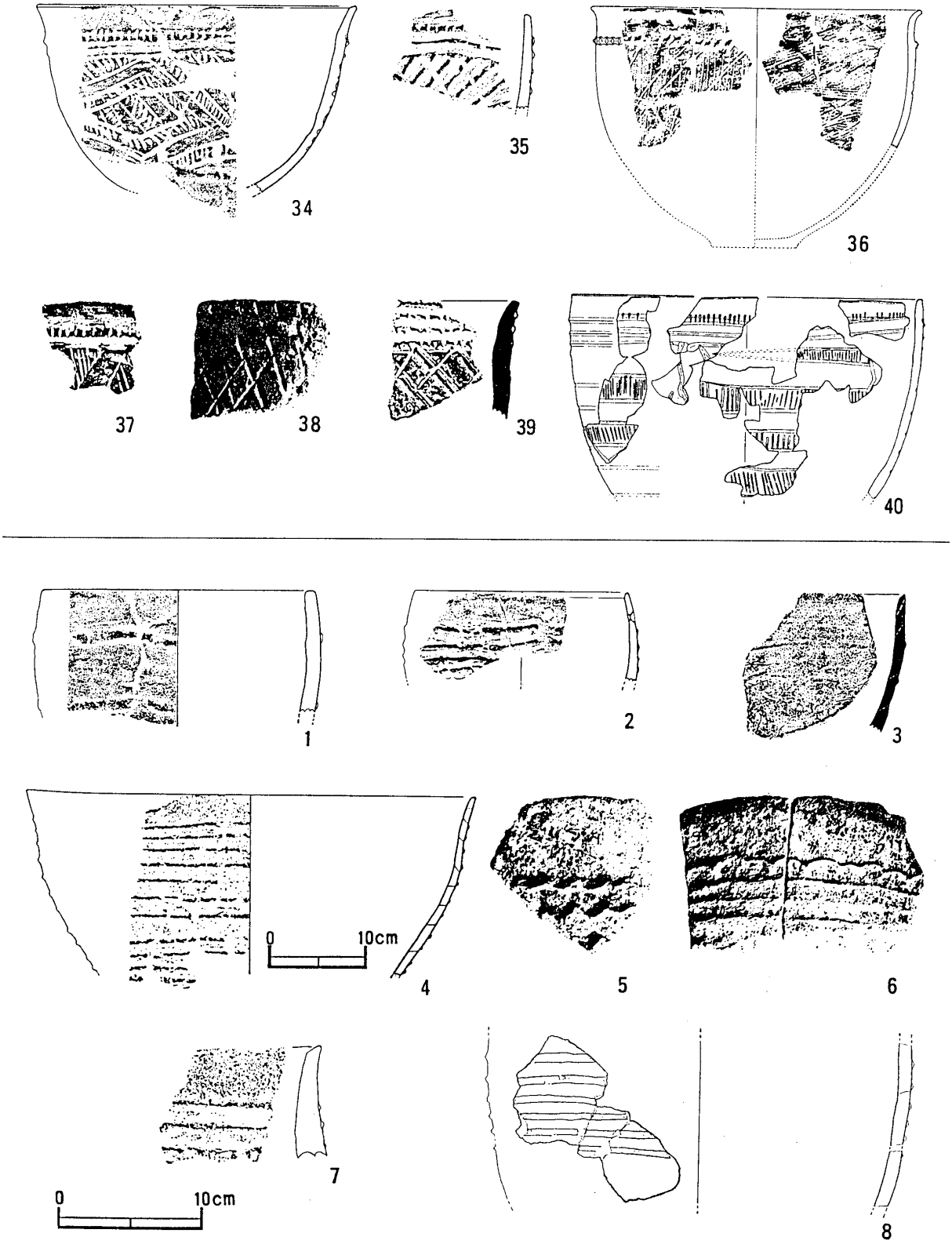


図22　隆起文A3・B1類　　新岩里34・35・1・2・4，越高尾崎36，東三洞37・38・3・5・6，山達島39，突山松島40・8，上老大島7　　38・5・6・7は縮尺不同

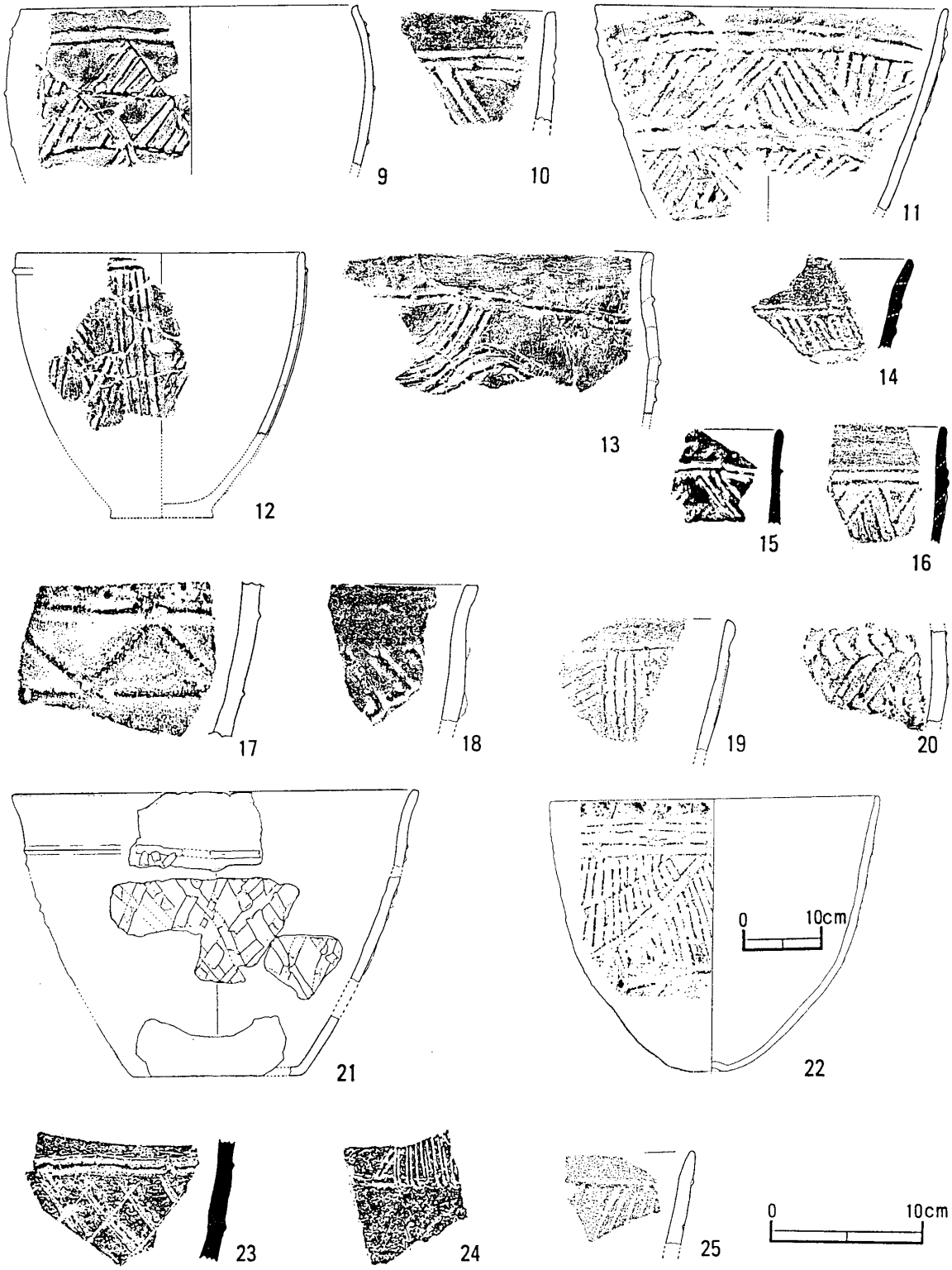


図23　隆起文B2・B3類　　新岩里9～11，越高12・13，東三洞14～16・24，上老大島17，煙台島18，欲知島19・25，突山松島20～22，山達島23　　17は縮尺不同

隆起帯の貼りつけ方・隆起帯断面・施文部位などがほぼ同一要素としてＡ３まで伝わることを意味する。型式変化が示される隆起帯は，横隆起帯→横隆起帯を基本とする複合隆起帯・複合隆起線→隆起帯＋沈線文類へと時間的変化がみられ，A1ａ・A1ｂ→A2ａ・A2ｂ→A3 という縦軸が成立する。

隆起文Ｂ類：隆起線文を基本とするもの。

B1（図 22.1～8）は，隆起帯としたA類よりも断面の幅が狭いものである。平底深鉢を呈しており，この中には小平底の器形も含まれる。隆起線は指先で摘みながら整えるのが一般的である。隆起線の断面は，A類の隆起帯の方形とは違って三角形をなすものが多い。施文部位は口縁部の中程から胴部にかけてである。隆起線が連続波状になるものは東三洞貝塚で主体をなす。この類は東シナ海に浮かぶ小黒山島でも出土し，隆起文土器の離島への広がりを示す。

B2（図 23.9～22）は，B1と似るが，複合隆起線を施すものであり，横隆起線を基本として多様化される。施文順序においても横隆起線を先に巡らす。突山松島遺跡の出土品は器形が丸底のように見えるが，小平底の痕跡を残しているものである（図 23.22）。このような器形は，韓国南岸の隆起文土器の特徴であり，九州では類例をみない。

B3（図 23.23～25）は，隆起線に沈線文類が組み合わされるものであり，数は少ない。施文部位は口縁の中程からであり，文様構成は綾杉文・斜格子文などの沈線が施される。

このＢ類もA類と同じように文様構成によって，B1の横隆起線→B2の横隆起線を基本とする複合隆起線→Ｂ３の隆起線＋沈線文へと変化がみられる。この様子はA類の変化と同一方向性を示すものである。分布域は，A・B類とも韓国南岸・島嶼地域に広がり，隆起文土器を出す遺跡で主体をなすものである。やはり，在地系のＩ群土器として認識すべきであろう。

隆起文Ｃ類：屈曲型器形からなるもの。

C1（図 24. 1～3）は，平底深鉢であり，器形においては胴部の下部に段を有し屈曲型をなすものである。施文部位は口縁部上段から胴部にかけてであり，文様は横隆起線を巡らした後に縦隆起線を施す。轟B式Ｃ２との関連性を色濃く残すものである。また，この中には轟B式土器の搬入品と思われる土器片が出土している（図 24.7,8）。

C2（図 24.4～6）は，C1と同じく屈曲型器形を呈するが，屈曲の程度が緩やかになるものや，文様において刺突・沈線文などが加わるものである。韓国南岸の一つの特徴である小平底深鉢と屈曲型器形が組み合ったタイプが新岩里遺跡で確認されている（図 24.6）。分布は南岸の東側の新岩里・東三洞・上老大島・煙台島からである。C1からC2へは，屈曲型器形の緩慢への退化，複合隆起線→隆起線＋刺突・沈線文へとの変化が認められる。

隆起文Ｄ類：縦隆起線・縦隆起帯からなるもの。

D1（図 24.9～15）は，深鉢を呈するものであり，口縁部にくびれをなすものもみられる。文様はいずれも縦隆起線からなるものであり，横隆起線と組み合わされるものもある。施文部位は口縁部の上端から胴部までであり，微隆起線をなすものも多い。上老大島遺跡出土のものは(図 24.15),

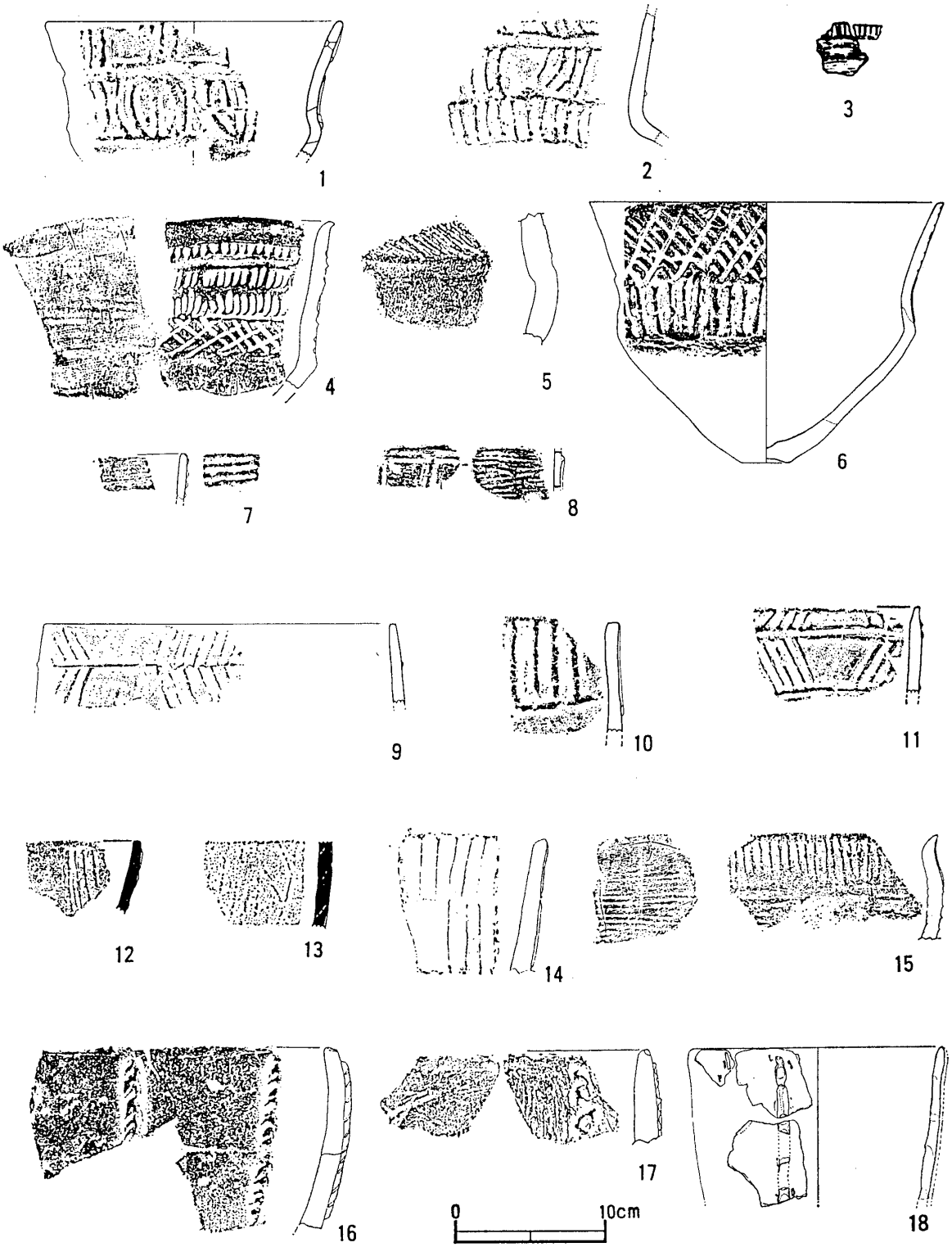


図24　隆起文C1・C2・D1・D2類　新岩里 1・2・6・9〜11，煙台島 3・7，上老大島4・5・14〜17，東三洞 8・12・13，突山松島18　3〜5・14〜17は縮尺不同

縦隆起線の後に数条の横隆起線を巡らすものである。これは今までの隆起線の施文順序における横方向→横方向以外という規則性を破るものであり，Ｂ１の横隆起線を留めようとする意図が窺われる。この類は数が少なく，文様においては轟Ｂ式のＢ類と類似性がみられる。分布域は南岸の東側に集中する。

D2（図 24.16～18）においては，埦型の器形もみられる。縦隆起帯間の幅が広いものであり，隆起帯において粗雑さも感じられる。やはり，Ｃ１の退化したものであり，隆起帯を施すことや隆起帯の貼り方などＡ類に似ることから隆起線に代わって在地化したものと考えられる。

以上のように韓国南岸の隆起文土器をＡ～Ｄ類に分類し，それぞれ型式変化を想定してきた。ここでは先述した三つの遺跡の層位的把握とともに各類の併行関係について比較検討を行いたい。それでは層位的状況を参考とし，韓国南岸の在地系のものとしたⅠ群土器のＡ類とＢ類の関係について触れてみよう。韓国南岸の隆起文土器は，江原道の東海岸の鰲山里遺跡でもみられる。鰲山里遺跡ではほとんどが表採のものであって正確な層位状況を把握しにくい。Ａ・Ｂ類両者がともに見つかっているもののその先後決定の決め手に欠く。韓国南岸の東三洞・上老大島ではＡ・Ｂ類がともに最下層で出土しており，やはり先後関係が決めにくい。全体的な流れとしてはＡ類からＢ類への変化が想定されがちだが，それはＡ類が主体をなしているからである。Ａ類とＢ類は同一条件で型式変化が示されることから，南岸では同時に定着して拡散したものと理解するのが妥当であろう。従って，本稿では未だに議論の対象とされる，隆起帯→隆起線の変化を考えている鄭澄元・宮本一夫と，隆起線→隆起帯に変化すると考える広瀬雄一・小原哲の見解とは異なる。横隆起帯のA1ａ・A1ｂと横隆起線Ｂ１は隆起文土器の初源的位置にあり，第１段階に位置づけられよう。この段階には既に対馬島の越高・越高尾崎遺跡や南海島嶼地方の隅々まで土器文化が広がり，最も西側である小黒山島まで達する。複合隆起帯のA2ａ・A2ｂと複合隆起線のB2は，第１段階の文様を基本とし発展継承することから第２段階に属そう。さらに隆起帯＋沈線類のＡ３と隆起線＋沈線類のＢ３は，隆起帯・隆起線を基本とし沈線類が施されることと，瀛仙洞式の古い段階と関連性を示すこととで，それぞれ第３段階と見なせる。

Ｃ類もＤ類と同じように南岸の在地のⅠ群土器とは器形や文様構成において大きな差を見いだせる。轟Ｂ式のC2との関連性がみられるものである。C2は文様において刺突文・沈線文が施され，A3・B3の様相を示すことから第３段階に属するものであり，これに先行するC1は第２段階となる。この屈曲型土器はいままで隆起文土器の範疇の中で取り扱ってきたが，調査の進展に伴って位置づけや分類が可能になりつつある。広瀬雄一はいち早く隆起文土器の屈曲型器形に注目し，屈曲するものとそうでないものが共存するとして，その対比を試みた（広瀬 1990）。本稿とは時期の設定に違いがあるが，変化方向の大まかなところでは類似するものである。

D1類は上老大島でみられるB1との組み合わせの状況からすると第２段階に位置づけられる。縦隆起線は九州の轟Ｂ式Ｂ類との関連性が窺われる。D2は隆帯が粗雑・退化し，Ａ類に同化されることから第２段階と見なせる。

2) 隆起文土器の編年と轟B式の屈曲型器形の流入問題

表3　隆起文土器の編年表

段階＼群	隆起文土器			
	Ⅰ群		Ⅱ群	
1	A1a A1b	B1		
2	A2a A2b	B2	C1	D1
3	A3	B3	C2	D2
	瀛仙洞式			

韓国南岸の隆起文土器群の各類の段階設定を行ったが，そのまとめと南岸での屈曲型土器の位置づけや地域性のことについて触れよう（表3）。第1段階は，Ⅰ群土器のみ存在する。横隆起帯・横隆起線（A1a・A1b・B1類）の平底深鉢が主流をなす。器形は平底深鉢のみであり，小平底が含まれる。この段階では九州の轟B式との関連性はあまりみられないようだが，煙台島貝塚の資料の中には轟B式のA1類の小片らしいもの（図 24.7）が確認されるので第1段階から交流が行われた可能性もある。

第2段階のⅠ群土器は，横隆起帯・横隆起線を基本とし，複合隆起帯・複合隆起線（A2a・A2b・B2類）を組み合わせることによって文様化する。器形は多様化し，椀型土器・注口土器・壺型土器などが出現する。それに轟B式の影響による屈曲型器形や文様（C1類），縦隆起線（D1類）をもつⅡ群土器が加わる。しかし，これらはⅠ群土器の基盤の上に加わるものである。分布はⅠ群土器が南岸全域や対馬島に，Ⅱ群土器が南岸東側にみられる。

第3段階のⅠ群土器は，隆起帯＋沈線類（A3類），隆起線＋沈線類（B3類）へと変化する。この変化は第2段階の属性を受け継ぐものであり，新しく加わる刺突・沈線文は次段階の瀛仙洞式土器に大きな影響を与えるものと思われる。Ⅱ群土器のC2も屈曲型器形は退化し，文様も刺突・沈線文へと変化する。D2は粗雑さが目立ち，在地化するものであろう。文様は刺突文や斜格子文などであり，A3・B3と共通的様相を持つ。屈曲型器形のⅡ群土器は第3段階でなくなり，韓国南岸においても在地系のⅠ群土器によって次段階に移行が果たされる。分布域は第2段階と同様である。

次に韓国南岸の在地系としたA・B類（Ⅰ群土器）と九州の轟B式の関連がみられたC・D類（Ⅱ群土器）の関係とを検討しよう。まず，隆起文土器は数量においてA・B類が主体をなし，C・D類は極めて出土例が少ないことを断っておく。隆起文土器が轟B式土器と比べて最も異なる特徴は，器面調整に貝殻条痕文が施されないことである。さらに，隆起帯・隆起線を口縁部の中程より巡らすこと，複合隆起帯・隆起線には斜方向・山形文様が主に用いられること，少ないものの小平底深鉢がみられることなどもあげられよう。実際に，韓国南岸のⅡ群土器には，屈曲型器形や縦隆起線の属性以外には南岸のⅠ群土器の要素が多くの部位に示されているのである。いわゆる，器面に貝殻による条痕文を持たないこと，小平底深鉢がみられること，刺突・沈線文類が加わることなどは，轟B式の屈曲型土器では存在しない属性である。従って，Ⅱ群土器のC・D類は隆起文土器の在地系の基盤の上，模倣的要素として受け入れられたものと考えられる。その時期は隆起文土器の第2段階であり，新岩里遺跡・煙台島貝塚から良い例が出土する。やはり，Ⅰ群土器を基盤とし，屈曲型器形と文様構成が受け入れられるが，これは轟B式C2の手法と同一である（図24.1）。

その後，第3段階になると文様や器形に変化が生じることになる。ここでも南岸の隆起文土器の一つの特徴である小平底が確認される（図 24.6)。文様は隆起線に刺突や沈線の斜格子文などが加わり，屈曲の程度が緩慢になり退化するのである。すなわち，この屈曲型器形は在地系のⅠ群土器に吸収されてしまい，分布域も新岩里・東三洞・煙台島・上老大島といった南岸の東側の地域に限られ，出土例も少ない。縦隆起線のD類もC類と同じく在地化されるものと考えられる。

ここに至って，韓国の隆起文土器の系譜問題に対する見解を示そう。隆起文土器をめぐる系譜問題は戦前から取り上げられ，未だに論議の対象となっている。隆起文土器の起源説に関する近年の論考をみると，南九州の轟式が北上して韓国南岸に影響を与えたという説(江坂1985，広瀬1985 a）と，鰲山里遺跡のC[14]年代の古さから大陸に隆起文土器の起源を求め，これらが南下するという説（任1986，鄭1985）とに二分される。この両者の対立は，隆起文土器を一つのまとまりとして認識していたからであろう。本稿で分類したように，在地系のⅠ群土器（A・B類）と広域に広がるⅡ群土器（C・D類）とに分けて考えることによってこの問題は解決できるものと思われる。すなわち，南下説はⅠ群土器に，北上説はⅡ群土器に当てはまる訳である。ところが，韓国南岸でのⅡ群土器は，Ⅰ群土器の基盤の上に受け入れられたものであり，山陰地方とのように活発な交流ではない。近年，韓国南岸で「屈曲型」土器以外に煙台島貝塚では轟B式のA類の小片らしいものも共伴しているが，まだ確実な存在であるとはいえない。従って，縄文時代の前期前半期においては，韓国南岸との関連性は山陰と比べれば少ないものと思われ，活発に交流が始まる野口・阿多タイプの段階まで待たなければならない。

Ⅵ. 轟B式土器の諸問題

1）在地系のⅠ群土器のあり方

縄文前期の前半期における轟B式土器群は，九州全域はもちろん，山陰・山陽地方，韓国南岸といった広い地域にかけて係わりを持つ。これら三つの地域では，それぞれ在地系の土器と屈曲型器形を中心として広域に広がる土器が共伴することが分かった。これを便宜上それぞれ「Ⅰ群土器」と「Ⅱ群土器」に呼んできた。在地系の土器群とした九州の轟B式A類，山陰と山陽のA・B類，韓国南岸の隆起文土器のA・B類はⅠ群土器，九州の轟B式C・D類，山陰と山陽のC・D類，韓国南岸のC・D類はⅡ群土器となる。ここでⅡ群土器は三つの地域で屈曲型・胴張型器形を主とし，型式変化もほぼ同様であるが，Ⅰ群土器は地域ごとに属性を異にする土器群である。

ここでは，これらの各地域でⅠ群土器の存在のあり方を考えてみたいと思う。まず，九州地方の轟B式のⅠ群土器について触れよう。轟B式において最も在地性の強いA類は，Ah直下の轟式土器A類の属性を受け継いで多条のミミズバレ状隆起帯として出現する。この多条のミミズバレ状隆起帯は，隆起帯本数の減少とくっきりした隆起帯の登場といった変化を示しながら野口・阿多タイプへ向かう。第2段階で単純深鉢より分化したA2bはA3bに変化し，野口・阿多タイプ土器群に影響を与えるものである。このように，九州でのⅠ群土器は縄文早期末からの貝殻条痕文を主とす

る伝統を受け継いでⅡ群土器と並存しながら次段階へ移行する。

山陰と山陽地方のⅠ群土器は，山陰のA類，山陽のB類からなる。山陰A類は，肥厚口縁を持つ土器であり，条痕のみを施すものが古い段階に属する。その後，口縁部の肥厚口縁に刺突文・押引文・貝殻文を施す第2段階，これら文様が口縁以下に広がる第3段階へと受け継がれる。第3段階のA3aの文様は主に刺突文と押引文からなり，区画文様帯が成立し主体をなす。また，肥厚口縁を持たないA3bは，区画文様帯などA3aとほぼ同一文様帯構成を示す。次段階の羽島下層Ⅱ式土器の文様的要素に近づくのである。山陽のB類は，口縁部に一条の隆起帯を貼りつけるものであり，この一条の隆起帯の上下に刺突文を施すものへと変化するが，第3段階には継承せず，消滅するものと思われる。山陰でみられた区画文様帯が山陽では存在しないことと，山陽B類の消滅という点からみればⅠ群土器文化の中心が山陰地方にあったものと考えられる。

韓国南岸のⅠ群土器は隆起文A・B類であるが，横隆起帯・横隆起線を基本とし，複合隆起帯・複合隆起線→隆起帯・隆起線＋刺突文や沈線文へとそれぞれ変化を示す。南岸においてこのⅠ群土器は，九州や山陰地方のように器面調整の際に条痕を持たないのが原則である。その他に隆起帯・隆起線が口縁の中程より下部へ巡らすことと小平底が隆起文土器の特徴として存在する。隆起文土器群は，この時期の以前から日本で流行する条痕文土器の伝統とは異なるものである。A3・B3の第3段階では，瀛仙洞式土器群でみられる刺突文・沈線文類の文様が登場することから次段階へとスムーズに移行するものと考えられる。

このように3地域のⅠ群土器の概要をみてきたが，いくつかの共通点があることに気づくであろう。それぞれの地域において，①土器文化の中心的役割を果たすこと，②各土器群の分布域の全域に広がること，③次段階である九州の野口・阿多タイプ，山陰・山陽地方の羽島下層Ⅱ式，韓国南岸の瀛仙洞式土器群へと影響を与える先行土器群として存在することなどがあげられよう。これらのⅠ群土器とともに屈曲型器形を主とするⅡ群土器が三つの地域の広範囲にわたって共伴する。Ⅱ群土器は各地域において在地のⅠ群土器と係わりを持つが，各地域によって様相を異にする。

2) 屈曲型器形を中心としたⅡ群土器のあり方と広域における交流

先に，屈曲型器形を主とするⅡ群土器の系譜問題について触れておこう。屈曲型土器の九州起源説と山陰起源説という系譜問題は，未だ諸研究者の間で意見の統一をみない。これは，アカホヤ火山灰降下後に先行様式の曖昧な条件下で突然出現し，型式変化も両地域でほぼ同一様相を示していたからである。筆者は山陰よりも九州起源説の可能性が強いものと考えているが，いくつかの可能性を提示すると，①縄文早期末の押引文土器や手向山式土器などに屈曲型器形の類例がみられること，②Ah直下の轟式土器の中に同心円状の文様が存在すること，③屈曲型土器の幾何学状文様は渦巻状文様以外に轟B式のⅠ群土器の文様要素が組み合わされること，④山陰の縄文早期末の土器には先行様式がみられないこと，⑤韓国南岸で出土する屈曲型土器が中九州と関連を持ち北上のルートが強いことなどがあげられる。山陰では縄文早期末に先行様式がないことや山陰在地系のA類

と係わりを持たないことから山陰起源説は可能性が薄いものと思われる。

以上の系譜問題を念頭において，Ⅱ群土器のあり方や交流問題を考えていきたい（図 25)。九州地方の轟B式のⅡ群土器は，屈曲型・胴張型という器形に特徴がある。アカホヤ火山灰降下の後に出現するが，その先行様式の確実な属性は摑めていない。第1段階は，渦巻状を基本とする幾何学状隆起帯からなるが，細部においては縦隆起帯やミミズバレ状隆起帯などが用いられ，Ⅰ群土器との関連性が示される(4・7)。図示はしていないが，B類にはAh直下の轟式土器の縦隆起帯の伝統がみられ，それにA類と同じくミミズバレ状隆起帯が加わるものである。このB類は在地系の特徴を有しながらも次段階の土器型式に移行しない。ほぼ同一分布域を示すC類と関連性を持ち，実際にミミズバレ状縦隆起帯がC類に組み合わされる。在地系土器の影響下で出現し，Ⅱ群土器に同化されるものであり，A類とC類の中間的役割を果たすものと思われる。Ⅱ群土器のC類に完全に同化された第2段階になって山陰・山陽や韓国南岸にもⅡ群土器の特徴として交流を果たすものであろう。第2段階は渦巻状を中心とする幾何学状隆起帯がなくなり，C類の屈曲の程度が多少緩やかになる(5)。また，山陰地方からの影響である刺突状文様がD類にみられ，相互交流の傾向が示される(8)。第3段階はC類の屈曲の角度が非常に緩やかになり，退化していく(6)。分布域は，第1・2段階では中九州の沿岸に集中するが，第3段階になると，北部九州や東九州の内陸部でも確認できる。

轟B式のⅡ群土器が山陰地方と係わりを持つのは，山陰・山陽の1段階である（10・13・14)。山陰・山陽でC1・D1として存在する屈曲型・胴張型器形は，轟B式1段階のC1・D1と同一様相を示すものであり，肥厚口縁の山陰・山陽のⅠ群土器とはあまり組み合わされることはない。この時期は九州との交流の初期段階にあたり，主に沿岸の遺跡でみられるものである。そのルートとしては，山陰へは日本海の沿岸に沿って，山陽・瀬戸内地域へは玄海灘・周防灘の沿岸に沿って到達するものであろう。第2段階では渦巻状の幾何学文様がなくなり，複合隆起帯を施す（11・12)。屈曲の程度も緩やかになり，退化する傾向にある。このような変化も九州の轟B式C2以降の様相と類似する。山陰・山陽の各地域では，Ⅱ群土器が沿岸部に集中してみられたが，C2の段階以降にはそれぞれ内陸および山間部にも広がるものと思われる。内陸や山間部では山陰のC1・D1が発見されていないのも土器の移動の面において方向性を提示するものであろう。山陰と山陽の境目にあたる帝釈峡遺跡群では両地域の土器の属性が組み合わされるものがみられる(16)。このⅡ群土器は瀬戸内海の島嶼地域や山口県の南部にもみられ，かなり広い地域に広まるものである。これに対して山陰D類は，C類と異なる型式変化を示す。第1段階では轟B式D1の様相がそのまま伝わるが，第2段階以降は山陰独自のものに変化する(15・17)。キザミ目を施した縦隆起帯＋複合の刺突・押引文や隆起帯＋刺突文といった属性を持つが，山陰A3と関連性を示す。轟B式のD2でもみられるが，これは山陰的要素が組み合わされた山陰のD2の影響であり，Ⅱ群土器としての交流の活発さを物語る。このように，Ⅱ群土器の九州と山陰との交流は，海路によるものであり，中九州周辺でアカホヤ火山灰降下後に出現した轟B式Ⅱ群土器が五島列島を経由して山陰や瀬戸内沿岸に影

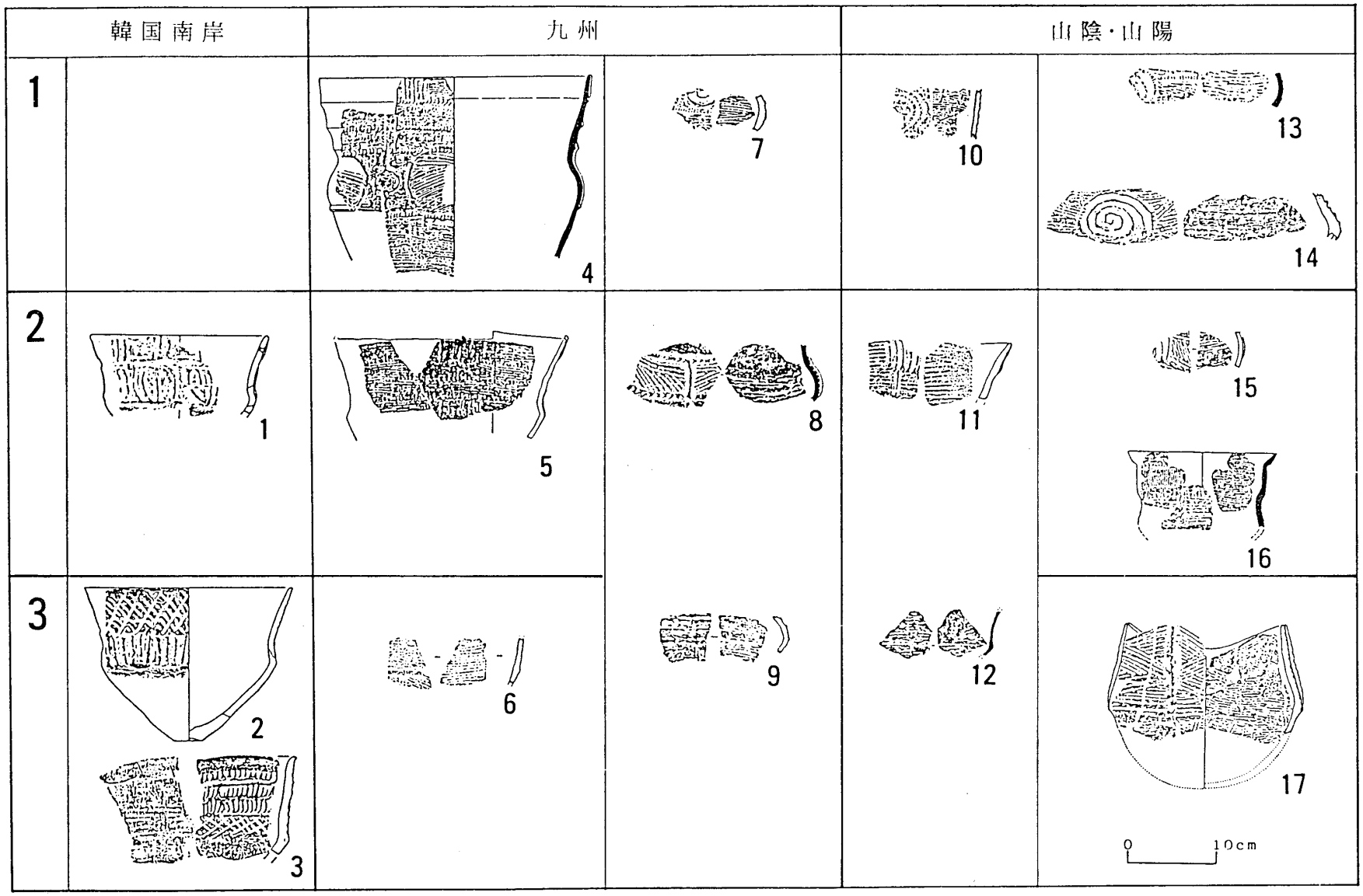


図25　三つの地域におけるⅡ群土器の変遷図　　新岩里１・２，上老大島３，轟４・８，荘５，堂崎６，大畝町園田７，柏原９，陰田10・14，西川津11・17，羽島12，大見13，上福万15，帝釈観音堂16　　３は縮尺不同

響を与えたものと考えられる。第2段階以降は内陸部や山間部まで拡散するものである。

九州と山陰の間では，第1段階から常に交流が行われ，海路を通して行き来した。このように交流が持続され，韓国南岸にも轟B式のⅡ群土器の属性が受け入れられる(1)。韓国南岸で轟B式Ⅰ群土器らしいものは煙台島貝塚の小片以外にはみられないが，これは轟B式のⅡ群土器が交流の主体となっていたからである。韓国南岸との交流の時期は，隆起文第2段階となり，模倣的要素が強い。山陰との間では活発な交流を行った屈曲型土器が，韓国南岸に達するとなぜ消極的なものになったのだろうか。その大きな原因は隆起文土器のⅠ群の強い勢いであろう。既にこの時期は南岸の西側の島嶼地方にまで土器文化が広がっていたのである。この勢いの中で轟B式の新しい屈曲型器形は拒まれ，広く分布することなく隆起文土器に同化されてしまうのである（2・3)。

VII. おわりに

以上のように，いままでの轟B式土器の研究の成果を土台にし，分類と検討を試みた。それでは，ここで広域に分布するⅡ群土器の実態について若干の考えを述べよう。Ⅱ群土器が出現する直前の南九州の屋久島付近では鬼界カルデラが噴火し，噴出した火山灰が九州全域はもちろん偏西風に運ばれ関東地方にまで達している。火山灰はきわめて短い時間に広範囲にわたって降下するものであり，火山灰が堆積した地域では大規模な植生の破壊が生じる。特に，九州地域ではアカホヤ火山灰の降下で動・植物が大きな打撃を受けたものと推定される。従って，内陸・山間部の地域では食糧の供給が十分でなくなり，海洋・沿岸にたよる傾向が高まってきたと考えられる。沿岸で捕れた魚介類の食糧が大きな比重を占め，貝塚が形成されることになる。その中でもⅡ群土器の集団は，海洋指向的要素が強かったものと考えられる。実際に轟B式の第1段階では，Ⅰ群土器が沿岸から内陸にかけて，Ⅱ群土器は沿岸から島嶼地方にかけて分布している。この現象は第2段階でも持続する。桒畑光博によると南九州の轟B式期の遺跡の内容は，海岸部の貝塚を中心として遺物も比較的豊富であるが，内陸部では小規模な遺跡しかみられないという（桒畑 1991)。これはアカホヤ火山灰の影響でこれまでの生活基盤が崩れたことを意味する。内陸部ではⅠ群土器がほとんどを占め，Ａｈ直下の轟式土器の伝統を維持しようとする傾向がある。これに対してⅡ群土器を持つ集団は，海という新しい生活に適応し，沿岸はもちろん遠洋にまで行き来しながら漁撈に携わったものと考えられる。こういったⅡ群土器集団の漁撈とⅠ群土器集団の採集・狩猟による獲得物は，食生活の不足分を相互補うことが可能であり，この点では両土器群の共存の意味が納得できるものと思われる。海へ適応したⅡ群土器の集団は山陰・瀬戸内の沿岸地域にまで達し，韓国南岸にも影響を与えたものと考えられる。

縄文前期前半期の九州，山陰・山陽，韓国南岸の地域では在地系の土器が存在しており，九州に起源を持つⅡ群土器が海路を通して山陰・山陽や韓国南岸まで広がるものと考えられる。このⅡ群土器はⅠ群土器とあまり交じることなく，各地域のⅠ群土器の器形や文様などの属性には大きな差を見いだせる。出土した数量もⅠ群土器の方がはるかに多く，Ⅱ群土器は数少ない。それに分布域

も両群が一致しないのである。このⅡ群土器は，三つの地域において主体的存在になりえず，客体的存在に留まる。従って，Ⅰ群土器のようにそれぞれ次段階である九州の野口・阿多タイプ，山陰・山陽の羽島下層Ⅱ式，韓国南岸の瀛仙洞式へ移行せず，消滅するかそれともⅠ群土器に同化されるのである。

このように三つの地域において，具体性の缺如がみられたⅠ群土器とⅡ群土器の関係やⅡ群土器の系譜問題，轟B式土器のアカホヤ火山灰直下との関係，隆起文土器と轟B式土器の関係，隆起文土器の系譜に関する対立問題などを順次示してきた。海を隔てて広範囲に広がり，また器形や文様においても多様であるこれらの土器をまとめて考察するに際しかなり臆測の部分もあったと思う。この点については先学のご教示・批判を待ちたい。

謝　辞

小稿をまとめるにあたり，以下の諸先生，諸氏，諸機関から御教示を賜わった。また，資料の実見や文献収集においても御協力を頂いた。記して深く謝意を申し上げます。

東和幸，安斎正人，安在晧，安徳任，井上和夫，任鶴鐘，今村啓爾，植田孝，岡内三眞，大井剛，小田富士雄，大塚達朗，大貫静夫，李基吉，李東注，李容玹，李準浩，甲元眞之，木村幾多郎，後藤直，古後憲浩，金誠龜，小畑弘己，河口貞徳，柿沼修平，小村美義，小原哲，早乙女雅博，申敬澈，島津義昭，坂本嘉弘，宋桂鉉，杉谷愛象，柴尾俊介，新東晃一，城前喜英，定森秀夫，白井克也，富永直樹，田島龍太，趙現鐘，千葉基次，全玉年，鄭澄元，玉置剛健，高橋信武，高野晋司，朱明俊，田村晃一，西谷正，中山清隆，永松実，新見幸夫，長田康平，広瀬雄一，萩原裕房，藤井和夫，藤本強，河仁秀，平野芳英，福島日出海，韓永熙，松岡史，宮本一夫，宮内克己，宮下貴浩，宮田栄二，宮田剛，柳浦俊一，山口信義，兪炳基，大分県天瀬町教育委員会，鹿児島県知名町教育委員会，長崎県宇久町教育委員会，長崎県福江市教育委員会，島根県匹見町教育委員会

引用・参考文献

＊九　州

麻生優『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会　1968

『阿多貝塚』金峰町埋蔵文化財調査報告書１　鹿児島県日置郡金峰町教育委員会　1978

安楽勉「五島列島の曽畑式土器」『考古学ジャーナル』365　1993

『伊木力遺跡』同志社大学考古学研究室　1990

『一湊松山遺跡』鹿児島県上屋久町教育委員会　1981

『五ッ穴横穴群―岩立Ｃ古墳―』熊本県教育委員会　1979

『右京西遺跡』萩台地の遺跡Ｘ　大分県萩町教育委員会　1986

江坂輝弥「縄文文化の発現」『世界考古学大系Ⅰ』平凡社　1959

江坂輝弥「縄文土器―九州篇５―」『考古学ジャーナル』12　1967ａ

江坂輝弥「縄文土器―九州篇６―」『考古学ジャーナル』15　1967ｂ

江坂輝弥「縄文土器文化の起源を探る」『日本史の黎明』八幡一郎先生頌壽記念考古学論集　1985

大脇直泰「九州における貝殻文土器について」『考古学研究』8-3　1962

『大畝町園田遺跡』鹿児島県宮之城町教育委員会　1985
『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県教育委員会　1984
乙益重隆「縄文文化の発展と地域性―九州西北部―」『日本の考古学Ⅱ』河出書房新社　1965
『鹿児島県埋蔵文化財の知識』鹿児島県教育委員会　1986
『榎木原遺跡』鹿児島県教育委員会　1987
『柏原遺跡群Ⅴ』　福岡市教育委員会　1988
『火山灰と考古学をめぐる諸問題―南・中九州篇』第22回埋蔵文化財研究会集会　1987
河口貞徳「鹿児島県片野洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会　1967 a
河口貞徳「鹿児島県黒川洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会　1967 b
河口貞徳・峯崎幸清・上田耕「鎌石橋遺跡」『鹿児島考古』16　1982
河口貞徳「塞ノ神式土器と轟式土器」『鹿児島考古』19　1985 a
河口貞徳「南九州の縄文貝塚」『貝塚は語る―南九州の縄文文化』鹿児島県歴史資料センター黎明館　1985 b
河口貞徳・西中川駿「鹿児島県下の貝塚と獣骨」『季刊考古学』11　1985 c
『木落遺跡・高源寺遺跡』鹿児島県日置郡金峰町教育委員会　1991
『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ』鹿児島県教育委員会　1977
『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅸ』鹿児島県教育委員会　1982
『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅢ総集編』鹿児島県教育委員会　1982
『楠橋貝塚―遠賀川中流右岸の縄文時代前期の貝塚』北九州市埋蔵文化財調査報告書69　1988
桒畑光博「南九州における鬼界カルデラ爆発後の遺跡」『南九州縄文通信』5　1991
『五島大板部洞窟の調査―縄文時代の水中貝塚―』大板部洞窟調査団　1986
小林久雄「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11　1939
坂田邦洋「九州の縄文早・前期土器の編年」『史学論叢』11　1980
潮見浩「嘉穂地方の縄文文化」『嘉穂地方史―先史編』1973
『四箇周辺遺跡調査報告書４』福岡市教育委員会　1981
『下菅生Ｂ・上菅生Ｂ遺跡』菅生台地と周辺の遺跡Ⅺ　竹田市教育委員会　1986
『下本山岩陰』佐世保市教育委員会　1972
『指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡』鹿児島県教育委員会　1977
『荘貝塚』出水市教育委員会　1979
新東晃一「南九州の火山灰と土器形式」『どるめん』19　1978
新東晃一「火山灰から見た南九州縄文早・前期土器の様相」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980
新東晃一『火山灰と南九州の縄文文化』南九州縄文研究会　1993
『瀬田裏遺跡調査報告Ⅰ』熊本県大津町教育委員会瀬田裏遺跡調査団　1991
『曽畑』熊本県文化財調査報告書100　熊本県教育委員会　1988
高橋信武「轟式土器再考」『考古学雑誌』75-1　1989
田島龍太「菜畑遺跡」『末盧国』1982
橘昌信『二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学付属博物館　1980
『谷頭遺跡』熊本県谷頭遺跡調査団　1978
『狸谷遺跡』熊本県教育委員会　1987
『天神山貝塚』福岡県志摩町教育委員会　1974
『長崎県埋蔵文化財調査報告Ⅸ』長崎県教育委員会　1986
『中浦洞穴』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書２　鹿児島県知名町教育委員会　1985
『永野遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会　1983
『菜畑』唐津市教育委員会　1982

『西之薗遺跡』鹿児島県教育委員会　1978
『新延貝塚』福岡県鞍手町埋蔵文化財調査会　1980
『貫川遺跡』1　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1988
『貫川遺跡』2　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1989
『貫川遺跡』3　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1990
『野久尾遺跡』鹿児島県志布志町教育委員会　1979
『野口遺跡―東部土地区画整理事業団関係埋蔵文化財発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書28　久留米市教育委員会　1978
『野口遺跡―久留米市バイパス関係埋蔵文化財調査報告』久留米市文化財調査報告書28　久留米市教育委員会　1981
町田洋『火山灰は語る』蒼樹書房　1977
町田洋・新井房夫「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラアカホヤ火山灰」『第四紀研究』17　1978
町田洋・新井房夫「広域テフラと考古学」『第四紀研究』22　1983
松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年」『考古学雑誌』47-3　1961
水ノ江和同「曽畑式土器の出現―東アジアにおける先史時代の交流―」『古代学研究』117　1988
水ノ江和同「『轟式土器』に関する三篇の論文」『考古学研究』38-4　1992
『三反田遺跡発掘調査概報』大分県直入町教育委員会　1985
宮本一夫「轟式土器様式」『縄文土器大観』Ⅰ　小学館　1989
宮本一夫「轟B式土器の再検討―京都大学文学部博物館所蔵資料を中心に―」『肥後考古』7　1990
『花ノ木遺跡』鹿児島県教育委員会　1975
『羽田遺跡（A地区）』大分県東国東郡国東町教育委員会　1987
『羽田遺跡（Ⅰ地区）』大分県東国東郡国東町教育委員会　1990
東和幸「アカホヤ以降の火山灰と縄文土器」『南九州縄文通信』4　1991
『平草遺跡』大分県天瀬町教育委員会　1982
『深堀遺跡―長崎市深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎市教育委員会　1984
『福江・堂崎遺跡』長崎県福江市教育委員会　1992
『二日市洞穴』大分県玖珠九重町教育委員会　1980
『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団　1972
山口信義「隆帯文（轟B式）土器研究ノート」『北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室研究紀要』創刊号　1988
『山崎B遺跡』鹿児島県教育委員会　1982

＊山陰・山陽
足立克己「出雲の前期縄文土器―竹ノ花遺跡出土の土器を中心として―」『えとのす』16　新日本教育図書　1981
網谷克彦「鳥浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究(一)」『鳥浜貝塚―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査二』福井県教育委員会　1981
井上智博「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相―中国地方を中心として―」『考古学研究』38-2　1991
『陰田』米子市教育委員会　1984
『宇部の遺跡』宇部市教育委員会　1968
『江口貝塚Ⅰ―縄文前中期編―』愛媛大学法文学部考古学研究室　1993
『大浦浜遺跡』香川県教育委員会　1988

岡田茂弘「近畿」『日本の考古学Ⅱ』河出書房新社　1965
鎌木義昌・木村幹夫「各地域の縄文土器—中国」『日本考古学講座』三巻　1956
鎌木義昌「広域文化圏の形成—縄文前期の文化」『世界考古学大系』一　平凡社　1962
鎌木義昌・高橋護「瀬戸内」『日本の考古学Ⅱ』河出書房新社　1965
鎌木義昌「縄文前期文化—西日本—」『新版考古学講座』3　雄山閣　1969
『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』鳥取県教育文化財団　1985
河瀬正利「中国山地の縄文文化—帝釈峡遺跡群を中心として—」『松江考古』3　1980
河瀬正利「山陰地方の縄文早期・前期土器の様相」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集　1986
『粟津貝塚湖底遺跡』滋賀県教育委員会　1984
『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』岡山県文化財保護協会　1974
潮見浩「本州西端地域の縄文前期土器」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980
『下山南通遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団　1986
宍道正年『島根県の縄文式土器集成』Ⅰ　1974
宍道正年「島根県の縄文土器の研究—編年を中心として—」『松江考古』3　1980
宍道正年「島根県の縄文土器研究の諸問題」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集　1986
『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ』　香川県教育委員会　1988
『タテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　島根県教育委員会　1979
『タテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　島根県教育委員会　1989
中越利夫「帝釈峡遺跡群出土の縄文前期土器の研究(一)」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅷ』1985
『長山馬籠遺跡』鳥取県溝口町教育委員会　1989
『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区一)』島根県教育委員会　1987
『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区三)』島根県教育委員会　1989
宮本一夫「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和五九年度』1987
宮本一夫「瀬戸内の縄文時代前期の地域様相—江口貝塚の事例を中心に—」『斎灘・燧灘の考古学』愛媛県大西町教育委員会　1993
『目久美遺跡』米子市教育委員会　1986
藤田憲司・間壁忠彦他「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』11　1975

＊韓国南岸
有光教一「朝鮮釜山府瀛仙町の貝塚に就いて」『人類学雑誌』51-2　1936
有光教一『朝鮮櫛目文土器の研究』京都大学文学部考古学叢書第三冊　1962
任鶴鍾「統営郡煙台島貝塚発掘調査」『伽耶』3　伽耶文化社　1989
任孝宰「新石器時代—編年—」『韓国史論』12　国史編纂委員会　1983
任孝宰「新石器時代의韓・日文化交流」『韓国史論』16　国史編纂委員会　1986
江坂輝弥「朝鮮半島櫛目土器文化と西九州地方縄文文化前期の曽畑式土器文化との関連性について」『考古学ジャーナル』128　1976
江坂輝弥「西北九州地方の縄文文化と朝鮮半島南部の先史文化」『考古学ジャーナル』183　1980
大曲美太郎「慶南多大浦にて貝塚発見」『どるめん』3-6　1934
及川民次郎「南朝鮮牧ノ島東三洞貝塚」『考古学』4-5　1933
『鰲山里遺跡』서울대학교博物館　1984
『鰲山里遺跡Ⅱ』서울대학교博物館　1985

『鰲山里遺跡Ⅲ』서울대학교博物館　1988
小原哲「韓国隆起文土器の検討」『伽耶通信』13.14合輯　1985
金元龍・任孝宰『南海島嶼考古学』서울대학교東亜文化研究所　1968
金元龍『韓国考古学概説』一志社　1973.1981.1989
權相烈「慶南統営郡煙谷里貝塚発掘調査会報」『博物館新聞』1989年3月
坂田邦洋『韓国隆起文土器の研究』昭和堂印刷　1978
坂田邦洋『対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究』広雅堂書店　1979
佐藤達夫「朝鮮有紋土器の変遷」『考古学雑誌』48-3　1963
L. L. Sample「Tongsamdong, A Contribution to Korean Neolithic Culture History」『Arctic Anthropology』vol. XI, No. 2, 1974
『上老大島』東亜大学校博物館　1984
『新岩里Ⅰ』国立中央博物館　1988
孫寶基『上老大島의先史時代살림』修書院　1982
鄭澄元「隆起文土器研究의諸問題」『伽耶通信』10　1984
鄭澄元「南海岸地方隆起文土器에대한研究—型式分類와編年을中心으로」『釜大史学』9　1985
鄭澄元（宮本一夫訳）「韓国南海岸地方における隆起文土器の研究」『考古学雑誌』72-2　1986
『突山松島Ⅰ』国立光州博物館　1989
『突山松島Ⅱ』国立光州博物館　1990
中山清隆「韓国南部の新石器文化と北部九州の縄文文化—嶺南地方南部海岸・島嶼部への関心—」『考古学の世界』慶應義塾大学考古学民族学研究室　1989
韓炳三「櫛目文土器」『世界陶磁全集』17　小学館　1979
韓永熙「新石器時代—地域的比較—」『韓国史論』12　国史編纂委員会　1983
韓永熙，任鶴鍾「煙台島조개터미断崖部Ⅱ」『韓国考古学報』26　1991
広瀬雄一「韓国隆起文土器論」『異貌』11　1984
広瀬雄一「韓国隆起文土器の系譜と年代」『異貌』12　1985 a
広瀬雄一「櫛目文前期の研究—韓国南海岸地域における編年を中心として—」『伽耶通信』13.14合輯　1985 b
広瀬雄一「韓国嶺南地方櫛目文土器の土器変遷」『考古学の世界』慶應義塾大学考古学民族学研究室　1989
広瀬雄一「韓国隆起文土器の諸問題」『考古学の世界』学習院考古学会　1990
藤田亮策「櫛目文土器の分布に就いて」『青丘学叢』2　1930
宮本一夫「朝鮮有文土器の編年と地域性」『朝鮮学報』121　1986
宮本一夫「海を挾む二つの地域—山東半島と遼東半島，朝鮮半島南部と南北九州，その地域性と伝播問題—」『考古学研究』37-2　1990
『欲知島』国立晋州博物館　1989
横山将三郎「釜山府絶影島東三洞貝塚報告—縄文式系統の朝鮮と大陸との関係—」『史前学雑誌』5-4　1933